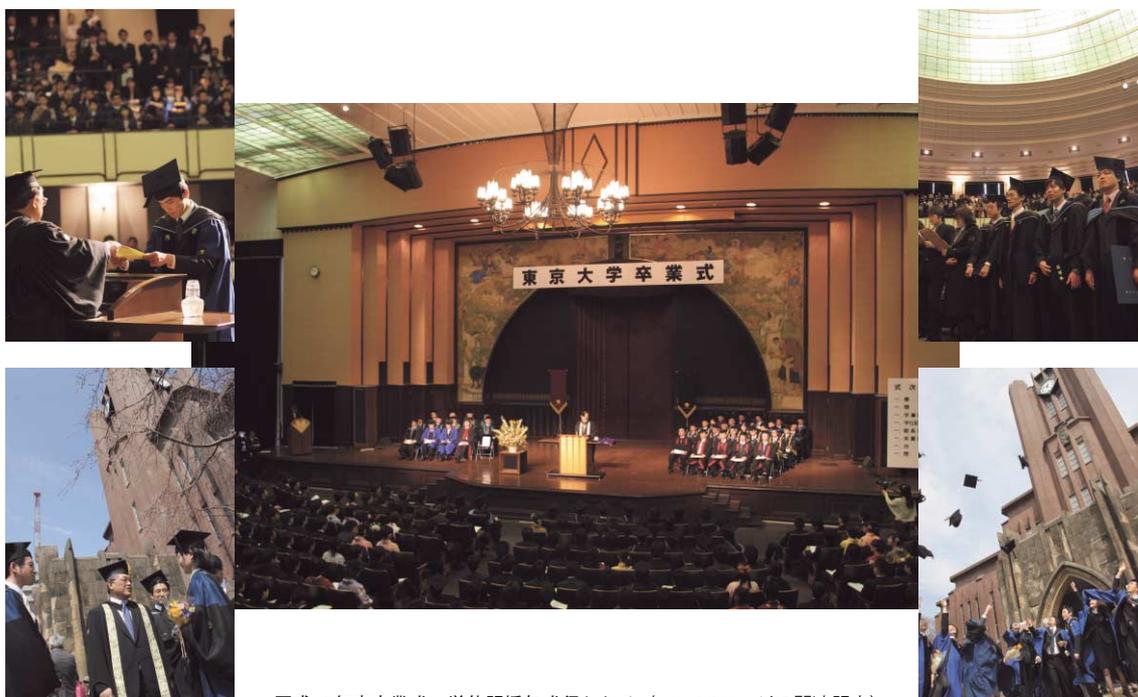




学内広報

No.1311

2005.4.13
東京大学広報委員会



平成16年度卒業式、学位記授与式行われる（14～28ページに関連記事）

CONTENTS

特別記事	2	別選考の合格者発表、平成16年度における各運動部成績
役員の就任、役員就任の挨拶、役員退任の挨拶、平成16年度卒業式行われる、卒業式総長告辞、卒業式来賓挨拶 ハンス・ヴィクセル カロリンスカ研究所前所長、卒業式来賓挨拶 大江健三郎、平成16年度学位記授与式行われる、学位記授与式総長告辞（修士課程）、学位記授与式総長告辞（博士課程）、学位記授与式（修士課程）来賓挨拶 藤嶋昭 特別栄誉教授、学位記授与式（博士課程）来賓挨拶 戸塚洋二特別栄誉教授		部局ニュース
一般ニュース	28	42
セクシュアル・ハラスメントに係る懲戒処分の指針制定される、部局長の交代、部局長退任の挨拶、本郷三丁目交差点に東大病院への案内看板が設置される		個人情報保護法対応説明会を開催、2004年度ノーベル化学賞受賞者講演会の報告
キャンパスニュース	38	掲示板
第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特		43
		平成17年度東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）給付申請者の募集について、病院ボランティアを募集しています、理学系研究科・理学部 第7回公開講演会開催のお知らせ、アジア生物資源環境研究センター公開シンポジウムのお知らせ
		訃報
		46
		甲藤好郎名誉教授
		広報委員会
		47
		広報委員長就任の挨拶、退任の挨拶
		淡青評論 本郷の景色
		48

役員の就任

平成17年4月1日付で役員の就任がありました。以下のとおりご紹介します。

総長

小宮山 宏

(任期：平成17年4月～平成21年3月)



昭和42年3月 工学部卒業
昭和47年3月 大学院工学系研究科博士課程修了
昭和63年7月 教授（工学部）
平成12年4月～平成14年3月 大学院工学系研究科長・工学部長
平成15年4月 副学長
平成16年4月 理事（副学長）

〔所属講座（研究部門）〕 反応プロセス工学講座
〔専門分野〕 化学システム工学、機能性材料工学、地球環境工学

理事（副学長）

桐野 豊 担当：研究、国際交流、環境安全、図書館、総合研究博物館

(任期：平成17年4月～平成18年3月)



昭和47年3月 大学院薬学系研究科博士課程修了
昭和60年10月 教授（九州大学薬学部）
平成5年10月 教授（東京大学薬学部）
平成13年4月～平成16年3月 大学院薬学系研究科長・薬学部長

〔所属講座〕 生体分子機能学講座
〔専門分野〕 神経生物物理学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕
学習・記憶の分子・神経機構

西尾 茂文 担当：財務、施設、キャンパス・交通、柏、病院、保健センター

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和52年3月 大学院工学系研究科修了
平成7年4月 教授（生産技術研究所）
平成14年4月～平成17年3月 生産技術研究所長
〔所属講座（研究部門）〕
機械・生体系

〔専門分野〕 熱制御工学
〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕

相変化現象など熱事象学、ヒートパイプ、ヒートシンクなど熱制御デバイス工学、ソフトエンジンなどエネルギー工学

古田 元夫 担当：教育、学生、入試、留学生、大学総合教育研究センター

(任期：平成17年4月～平成18年3月)



昭和49年3月 教養学部卒業
昭和53年3月 大学院社会学研究科博士課程中退
平成7年4月 教授（教養学部）
平成13年2月～平成15年2月 大学院総合文化研究科長・教養学部長
平成16年4月～平成17年3月 副学長

〔所属講座（研究部門）〕
地域文化研究専攻多元世界解析大講座

〔専門分野〕 ベトナム研究

〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕

「ベトナムの世界史」（東京大学出版会）、「ホー・チ・ミン」（岩波書店）、「アジアのナショナリズム」（山川出版社）

浜田 純一 担当：総務、広報、評価、人事、監査、組織・制度改革、情報公開・個人情報保護、イベント、バリアフリー支援室、コミュニケーションセンター

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和47年3月 法学部卒業
昭和49年3月 大学院法学政治学研究科修了
平成4年4月 教授（社会情報研究所）
平成9年4月～平成11年3月 社会情報研究所長
平成12年4月～平成14年3月 大学院情報学環長・学際情報学府長

〔所属講座〕 社会情報学コース

〔専門分野〕 情報法・情報政策

〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕

「メディアの法理」（日本評論社）、「情報法」（有斐閣）

石川 正俊 担当：情報、産学連携

(任期：平成17年4月～平成18年3月)



昭和52年3月 工学部卒業
昭和54年3月 大学院工学系研究科修士課程修了
平成11年4月 教授（大学院工学系研究科）
平成13年4月 教授（大学院情報理工学系研究科）

平成16年4月～平成17年3月

副学長

〔所属講座（研究部門）〕 認識行動情報学講座

〔専門分野〕 システム情報学

〔研究内容（代表的な著書や論文等）〕

センサ情報の並列処理、ロボット、ビジョンチップ、
光情報処理**理事**池上 久雄 担当：卒業生との連携、学友会、ホームカ
ミングデー、基金、運動会

〔任期：平成17年4月～平成18年3月〕



平成3年 三菱商事（株）参

与・職能担当役員補

佐兼人事厚生部長

平成10年 （社）日本貿易会常

務理事

平成12年 （社）日本貿易会常

務理事兼国際社会貢

献センター理事長

平成16年4月～ 理事

上杉 道世 担当：事務組織、労務、法務、倫理

〔任期：平成17年4月～平成18年3月〕

平成11年7月 文部省主任行政
改革官平成12年6月 科技厅長官官房
審議官平成13年1月 内閣府大臣官房
審議官

平成15年8月 事務局長

平成16年4月～ 理事

監事

石黒 光

〔任期：平成17年4月～平成18年3月〕

平成13年1月 （株）インスパ
イア最高執行責
任者平成15年11月 特定非営利活動
法人言論NPO理
事（非常勤）**監事（非常勤）**

佐藤 良二

〔任期：平成17年4月～平成18年3月〕



公認会計士

平成16年6月 監査法人トーマ
ツ東京地区経営
執行社員**副理事**

石堂 正信

担当：調達、財務分析

平成13年6月 （株）JR東日本
企画取締役経理
局長

平成15年12月 総長室顧問

平成16年4月 副理事

竹原 敬二

担当：基金、人事制度改革、広報、コミュニケーション
センター、キャリアサポート室平成7年 （株）リクルー
ト取締役平成13年4月 （株）リクルー
ト常務執行役員平成16年1月 総長室顧問（兼
任）

平成16年4月 副理事

副理事（非常勤）

片山 直久

担当：施設、基金

平成10年7月 興和不動産（株）
常務取締役

平成16年4月 副理事（非常勤）

役員就任の挨拶

世界一の総合大学を目指しましょう

総長 小宮山 宏

熾烈な競争環境

大学は現在、世界的な競争環境におかれています。人材育成の場として、未来を牽引する創造の場として、社会との間で知が交叉する場として、どの大学が21世紀をリードするのか、リーディングユニバーシティ間の競争は熾烈を極めます。優秀な若者に、トップクラスの研究者に、問題意識を抱くすべての人々に、いかに魅力ある環境を提供できるのか、それが大学の競争力の本質です。私の持論である「知の構造化」「自律分散協調系」、そして、新たな支援組織の基本構造として新執行部で議論を進めている「飛車角方式」を紹介し、どのようなコンセプトで世界一の総合大学を目指そうと考えているのかをお伝えして、すべての構成員のご理解を求めたいと思います。

知の構造化

20世紀における学術の進歩は、学術領域の細分化をもたらしました。専門を異にする人々の相互理解は著しく困難になっています。社会から大学が見えにくくなっているばかりではなく、大学の内部でもお互いにお互いが見えないという状況が生じています。現在の大学は、大学人が本質的に有する協調性が影を潜め、もう一方の本質である自律性のみが顕在化しているかのように私の目には映ります。こうした状況の本質的な原因は、相互理解が困難になったことにあるのではないのでしょうか。

外部との関係で言えば、大学に対する社会の要請の多様性に留意する必要があります。宇宙の果ては何かといったナイーブな好奇心への答え、環境といった複雑な問題への包括的な解、あるいはまた、生産活動のひとつの局面のみに必要な高度な専門的知識など、多様な知を多様な社会が求めています。細分化した領域における熾烈な競争の中で、知の創造にしのぎを削る大学人にとって、こうした期待に個人として応えることは容易ではありません。知識の再構成や、先端知の分野共通的な表現など、困難な作業が必要とされるからです。

知の構造化は、こうした困難を克服するための基盤となり得ましょう。それは、細分化した知識を相互に関連づける営為であり、研究者が自らを全体像のなかに位置づけることを可能にし、テーラーメイドな教育や、先端と基礎との距離を短縮する教育を実現し、社会の要請と人類の知との交叉によって新しい概念を産み出すことを可能にするための知的挑戦なのです。それが結局、拡大してしまった学術と人との間の距離を短縮してくれるで

ありましょう。現在企画している「学術俯瞰講義」「学術統合化プロジェクト」などは、こうした挑戦の一環としてご理解ください。

卓越した研究をいっそう推進しつつ、「知の構造化」を進めることによって、学術の成果と社会の問題が交叉する場となり、新しい学術領域、社会のモデル、産業を産み出してゆくことが可能になるでしょう。

自律分散協調系

大学は、その成員が自らの確信に基づいて行動する場です。それが知の創造の場、最高教育研究機関として不可欠な条件であることを、人類は歴史の教訓から学んだのです。しかし一方において、組織として十分効率的に機能しているのか否かを、大学は社会から鋭く問いかけられております。この問いかけに対して、世界の大学人が明快に答えているとは残念ながら申せません。

自律分散協調系という、生命体を表現する概念があります。例えば人の場合、心臓や肝臓といった臓器は体内に分散して存在しそれぞれ自律的に動いていますが、それら要素の総体としては協調的に機能し、生命の営みがなされています。この概念は、まさに大学のあるべき姿を象徴するものなのではないのでしょうか。自律分散協調の実現に成功した大学は、21世紀の新しい大学のモデルを提供することになり、世界のリーディングユニバーシティとしての評価を獲得することになるでしょう。

「自律分散協調」をキーワードとして、機動力のある中枢、緩やかな分権、柔軟なインターフェイスという三つの仕組みを適切に動かすことで、活力ある大学のモデルを開発していきたいと思えます。

情報は共有されなかった

ところで唐突ですが、運営費交付金を年度末に使い切る必要がなくなったことをご存じでしょうか。繰越が可能となったからです。3月末に多くの研究室が残金をゼロにしたことからすると、知らない人の方が多いことはおそらく確かでしょう。繰越が可能になったことは、科所長会議でも事務部長会議でも、なんども説明したことなのですが、現場にはほとんどといって良いほど伝わっておりません。

これはほんの一例にすぎません。大学の中で、情報交換は円滑に行われていないのです。その理由は明らかでしょう。上意下達で縦割りの現在のシステムは、変化の緩やかだった時代の遺物であり、激しく変化する中で機動的に情報を共有する機能を持ちあわせてはいないのです。

生命体には脳と神経があって、情報がすみずみまでゆきわたっているからこそ、自律分散協調系であり得るのでしょう。つまり神経系が「知のめぐり」を司っている

のです。私たちの組織が「知のめぐり」のための何かを必要としていることは確かです。

高業績の企業など情報共有がうまくいっている組織を模倣すれば良いのかというと、そうはいきません。自律性の高い部局からなる大学にふさわしいモデルは見あたらないからです。おまけに東京大学の部局の数は40にも達し、それらは5千人の構成員を擁する研究科から数人のセンターまで、規模も、ガバナンスの構造も多様なのです。ドラスティックな組織改編は体力を消耗させますから、可能な限り避けるべきです。したがって、現在のシステムからのソフトランディングを可能にする、東京大学にふさわしい仕組みを、私たち自身が産み出さなければならぬのは自明のことでしょう。

飛車角方式

現場が抱える問題は、しばしば縦割り組織の狭間に生じます。しかし、縦割り組織の構成員が狭間の問題に答えるのは容易ではありません。その結果、担当者に聞いたがたらい回しにされたといった事態にしばしば陥るのです。縦割りの弊害は多くの人を感じていますが、どうも、縦割りになるということ自体はあらゆる組織の宿命のようです。したがって、縦割り化はやむを得ないものとして、その弊害を克服する知恵をもっているのかどうか、それが組織としての機能を左右するのです。

ワンストップサービス、つまり、そこに聞けば決してたらいまわしにされない、時間がかかる場合はあっても必ず答えが帰ってくる、そういった機能を現在の支援組織に付け加えるのがよいのではないのでしょうか。部局毎のワンストップサービス係を、これを部局パートナーと呼びたいと思いますが、本部職員に担って頂くことを検討しています。その部局に属する教職員であればだれでも質問ができ、必ず答えが帰ってくる。そして、そのQ&Aはホームページで公開され、蓄積されるのです。実は、COE推進室はワンストップサービスの試行モデルでもあって、28の21世紀COE拠点に対してワンストップサービスを行ってきました。試行錯誤はありましたが、結果的には非常にうまく機能し好評を博しています。実験はすでに成功したのです。

部局や専攻という縦割りの教育研究組織と、部や課からなる縦割りの支援組織が、それぞれの内部においても、教育研究組織と支援組織の間という意味でも、十分な「知のめぐり」をもたずに動いているのが現在の私達の状況です。

飛車角方式は、将棋盤の行を部局に、列を部課に模し、部局パートナーが部課全体を縦横斜めに動き回る状況をイメージします。これまでが、主として、直近の上司だけと向きあう「歩」や、せいぜい同一課内で動く「香車」だったとすれば、部局パートナーは「飛車」であり「角」

でしょう。そして、やがて職員の多くがそのような機能を果たしうようになったとき、世界一の教育研究支援組織が私達の手のものになるのです。

COE推進室の経験からしても、Q&Aは無限に存在するわけではありません。半年も経たないうちにおよそ出尽くし、一年回せば情報が共有でき、そのときには新たな変化に機動的に対応できる体制が整うのです。そうやって始めて、自律分散協調系へ向けての第一歩を踏み出したことになるのです。現在のシステムにワンストップサービスを導入した飛車角方式によって、世界一の教育研究支援モデルを確立しましょう。そして、世界一の総合大学の実現を目指しましょう。

ご挨拶

理事（副学長） 桐野 豊

研究と国際交流担当の理事として一言抱負を申し上げます。科学（＝科に分かれた学問）はその名が示すとおり、発展するとともに細分化していくことをその本性の一つとしています。従って、一方で全体像を明らかにする活動（＝知の構造化）が無ければ、いわゆる「タコツボ化」に陥る危険性を伴っています。更に、これまでの日本の大学組織は、産業構造に対応して設立された部局の連合体のようなものであったため、学問固有の構造が見えにくくなっていました。本学では、現在、いくつかの学問分野において部局を越えた研究者のネットワークが自律的にできつつありますが、そのような活動を総長室は支援していきたいと思えます。このように各部局に既に存在する自律分散的活動を協調させて、部局と本部の間に持続的win-win関係を構築することと並んで、未だ存在しない全く新しい学問分野の誕生を促すための支援も、総長室の使命であります。そのため、研究者が研究に専念できるような環境を整えること（研究支援組織の強化、若手研究者への支援）にやや長期的な視点で取り組みます。また、領域創成・学術統合化プロジェクトのように、総長室自身もそのような試みを行います。

現代社会においては、知的生産は大学だけではなく、社会の様々なところでなされています。また、現代社会が直面している大きな課題（例えば、Global Sustainability）は、大学のみで、あるいは一国のみで解決できるものではなく、学問領域、大学、国境を越えた共同作業が必須です。このような活動において、東京大学は世界の一流大学と連携・競争して、名誉ある地位を占めたいと思えます。平成17年度には、アジア特に中国との連携を強化する予定であり、16年度に準備された北京リエゾンオフィスを開設し、稼働させる計画です。

社会の中の大学

理事（副学長） 西尾 茂文

法人として船出した本学の理事に就任するに当たり、研究について重要と考えていることを述べご挨拶にかえたい。

大学では、物事の理解の論理的普遍性を深める普遍化研究や、物事を理想に近づける論理的創造性を持った創生的研究など体系的論理性を持った研究すなわち学術研究が行われている。創生的研究は無論のこと、普遍化研究も、個性的な視点から成果がもたらされることが多く、したがって大学において重要なことは、「自律的研究（課題設定を含む）による学術の多様性」を保障することである。この意味から、総合大学としての本学で重要なことは、まず、多様な優れた研究の中から新たな学術パラダイムの胎動を見いだし、それを学術の奔流として先導的に育て上げることであろうと思っている。一方、社会を構成する物事の多くが科学や技術あるいは先端科学技術の成果によりもたらされている現代に於いては、学術研究には、普遍化研究や創生的研究に止まらず、その成果を社会に還元する段階までの学術研究を行うこと、あるいは社会課題の解決に資することを積極的に意識した普遍化研究や創生的研究を行うことが求められるようになった。すなわち、個々の研究に於いても、自律性のみならず、また単なる多様性のみならず、研究成果を社会に還元することを意識した啓行（先頭に立って道を開くこと）的研究が求められている。ここで、啓行的研究はすぐに役立つ研究を意味しているのではなく、将来社会のビジョンあるいはグランドデザインに向かって道を開く研究を意味している。この意味から、総合大学としての本学で重要なことの第二は、将来社会の総合的ビジョンを構成し、それに基づく啓行的研究を展開することであろうと思っている。

学志を育む東京大学

理事（副学長） 古田元夫

私は、教育・学生担当の副学長として、東京大学を、学問のおもしろさに目覚め、学問をしようという志＝「学志」をもった人材を養成する場として、さらに発展させたいと思っています。小宮山新総長は、東京大学の教育の目標を、「本質を捉える知、他者を感じる力、先頭に立つ勇氣」とされていますが、ここには「学志」をもった人材のあり方が、より具体的に提示されています。

東京大学が「学志」を育む場として発展する上で、学生の皆さんに呼びかけたいことがあります。東京大学は、日本最大の国立の総合大学として、演習林、農場、牧場、植物園、臨海実験場など、様々な自然に触れることのできる場があり、また文系・理系双方の様々な分野で現実の社会や自然を対象としたフィールドワークを基礎とする研究に従事している教員が多数おられます。学生の皆さんには、ぜひ、東京大学の持つこうした資源を活用して、現実の社会や自然の生々しさに触れてほしいと思います。

また、東京大学は、日本を代表する総合大学として、様々な分野の研究者、多岐の事務を担う職員、そして日本全国、世界各地から集まった学生という、きわめて多様な構成員を持っています。ここでは、自分とは異質な他者に触れる機会が豊富にあります。学生の皆さんには、こうした東京大学の条件を活用し、大学の様々な活動に積極的に参画することを通じて、自らの社会性を磨き、「他者を感じる力」を涵養してほしいと思います。今年8月には、ハーバード大学の学生が中心に企画するHarvard Project for Asian and International Relations (HPAIR) の国際会議が、本学の共催で東京で行われます。こうした機会も、学生の皆さんに積極的に活用してほしいと思います。

就任にあたっての挨拶

理事（副学長） 浜田 純一

総務は、東京大学の教育・研究を発展させていくための、人・情報・制度などの基盤を整備する役割と考えています。そこには、男女共同参画やバリア・フリー、教職員の規律、情報公開など、着実に進めていくべき課題がありますし、この四月からは個人情報保護制度への対応も始まっています。また構造的な課題としては、業務見直しがあります。法人化のメリットを生かして、一方で成果主義の効果的な活かし方を考えていくことが必要ですが、同時に、東京大学がこれまで培ってきた組織文化の良さも活かすことが大切です。東京大学の伝統的な力を、法人化をばねに、学生、教員、職員すべてが能力をより発揮できる形で展開できるような環境を整える努力をしたいと思います。

広報や評価という業務も、同様の意味で重要です。評価の仕組みについては、評価支援室での作業を着実にすすめながら、さらに学内の議論を深めて、評価の望ましいモデルを東京大学の側から積極的に打ち出すことができると考えています。広報という点では、「淡青」や東京大学のホーム・ページをより魅力あるものにする努力を続けたいと思います。とくに今年度からは各部局の広報担当者との連携を強化する体制をとりましたので、総合大学としての東京大学の魅力をより豊かに発信できると思います。また、学内のコミュニケーションの円滑化は、大学の総合力のいっそうの発揮につながります。各部局という教育・研究の現場を大切に、それら相互、またそれらと本部との間のコミュニケーション・ルートのいっそうの整備を通じて、相互の意思疎通や教育・研究をめぐる議論のいっそうの活発化が促進できるような環境を整えたいと考えています。

情報環境整備と産学連携

理事（副学長） 石川 正俊

東京大学では、世界のトップを走る様々な教育研究活動が行われ、多くの優れた成果が生まれています。これらの活動を効率化し、成果を積極的に社会に発信するためには、その基盤として情報環境の整備が不可欠となっております。つまり、創造された知識が瞬く間に人類の共有物となる現実の中で、大学が知識集約の主体であり続けるためには、すべての活動を支援する情報システムの整備が重要な意味を持つこととなります。加えて、この4月1日より施行された個人情報保護法や昨年強化された不正競争防止法等では、大学が社会的責任を果たすため、機関としての情報管理が求められており、全学で体系的に取り組む必要があります。具体的には、セキュリティの強化と責任体制の明確化を前提に、情報の電子化・共用化はもちろんのこと、情報の活用・連携体制を確立して、学生や教職員、さらに社会への積極的な情報サービス体制の整備を東京大学にふさわしい形で実現することが喫緊の課題と考えております。

また、社会との連携の一環として、産学連携の一層の充実も図っていきたいと考えております。産学連携は、東京大学の優れた研究成果を目に見える形で社会に還元する活動として、ここ数年、積極的に基盤整備を進めてまいりました。立ち上げに注力してきた今までは違い、今後はその機能を用いて実績を積み重ねることにより、大学の重要な機能の一つとしての基盤を確立したいと考えております。

このような整備により、快適な情報環境とスムーズな産学連携環境が実現され、大学の教職員並びに学生が本来の責務に注力できる環境を創り出すことを目指したいと思っておりますので、ご理解とご協力をいただければと存じます。

卒業生との連携—基礎から飛躍へ

理事 池上 久雄

昨年4月の法人化にあたって、従来東大ではややもすると軽視される傾向もあった「卒業生との連携」を構築しようとする大学の意思を受けて、民間出身の唯一人の理事として着任しました。

以来一年間、昨年3月の卒業式での「卒業生と大学とのパートナーシップが今日から始まります」という総長メッセージから始めて、10月の東京大学基金の設立、東京大学学友会の創設、海外各地の同窓会の設立そして大学の主催としては初めてホームカミングデイの実施と、卒業生とのブリッジを立ち上げるべく一歩ずつ進んできました。本年1月には、卒業生8万人に対して「東京大学学友会ニュース」を一人ひとりの手元に届けることができました。東大基金の事務局には、事務スタッフと共に、卒業生をはじめとする基金ディレクターの方々が、生き生きと活動してくださっています。まだまだ磐石とは言えませんが、連携の基礎が固まりつつあるということは言えましょう。新しい年度は、この基礎の上に立って発展を期する年です。

まず、独り立ちした東京大学の財政的な基礎固めとしての大切なプロジェクトである第3の創業・創立130周年記念募金「東大130（トウダイ・ワン・サーティ）」と名付け130億円の基金のキャンペーンを、2007年度末までの3年間にわたって全学挙げて取り組んでいきます。小宮山新総長の新経営方針の下で、国内外に亘って展開されていくことが打ち出されており、この実現に向けて、東京大学基金は事務局として重要な役割を果たしていくこととなります。

同時に、キャンペーン期間だけでなく、長期的に物心両面に亘って卒業生の強力な支援を受けていくことが、大学にとっては必要不可欠なところで、そのためにも「東京大学学友会の着実な発展」を期したいと考えています。

学内外の皆様の温かいご支援をお願いいたします。

事務組織のあり方を変える

理事 上杉 道世

私は、前年度に引き続き、事務組織及び労務を担当いたします。

法人化によって最も変化を迫られている職種は、事務職員です。東京大学の教育研究が、世界最高水準を目指して飛躍しつつある現在、教育研究の活動を支える事務組織のあり方もそれにふさわしいものにならなければなりません。

しかし現状を見ると、公務員時代の長年の習慣が色濃く残っています。決まったルールをきちんと守ったり、指示された業務を忠実に行ったりすることは、それはそれで大切なことかもしれませんが、今後はそれだけでは不十分です。急激に変化する大学の業務の中で、教育研究の発展に何が重要かという観点から、新しい課題を見出し、プランを立て、解決策を実行していく、そのような意欲と能力を一人ひとりの事務職員が身に付けなければなりません。

このため、私はこの1年間、「事務職員等の人事・組織・業務の改善プラン」を公表し、いくつかの新しい試みに取り組んできました。学内公募や希望調書の作成など職員の自発性を生かす人事異動の実施、業務の無駄を省いて合理的で効率的なものにする見直し、組織のフラットで柔軟なあり方への改変など、いくつかの前進がありました。

しかしまだまだ為すべき課題は山積しており、変化は始まったばかりです。私は、東京大学の事務組織が、教員や学生を支える機能を十分に発揮し、日本の大学のモデルとなり、さらには世界最高水準の組織という評価を得られるよう努力していきたいと思います。

新年度は「契約」を見直しましょう

副理事 石堂正信

法人化から1年が経過しました。法人化によって最も大きく変化したのは、財務だと思います。会計処理の難しい原理原則はともあれ、これまで財務の帳尻は国がめんどうを見てくれたのと違って、運営費交付金が「渡し切り」になりました。それだけ取っても、限られた収入のうち既に使われたのはどのくらいか、国以外からの収入はどれくらい期待できるのか、といった情報を適時適切に捉える必要が出てきたわけです。

そのような新たな要請に応えるために、月次決算、上期末の決算整理、それに基づく予算の見直し等が実施に移されました。また、雑収入に関する予算の弾力条項とか部局間の予算過不足の調整といった、法人化により増した自由度を活かした措置もとられました。さらに、資金を本部管理下に集中して余裕資金の運用を行い、運用益という成果物も得られました。年度末決算という重大時が目前に控えてはいますが、この1年、関係者の大変なご努力により、全体としてはまずまずの船出だったように思われます。

一方、もうひとつの大きな課題であった調達面での改善は、いまひとつ進捗しませんでした。物品購入、役務の契約について、これまでの実績が「紙」ベースでしか存在せず、改善の手掛かりとなるはずの実態把握が難しかったことがあげられます。集約により大きな効果が得られる分野の特定、そして、より競争原理が機能する環境を作ることで改善を図っていきたくと考えています。各部局においても、更新される契約、新規の契約、ひとつひとつに新たな眼を注いでみて頂きたいと思います。

渉外本部・広報・キャリアサポート室担当

副理事 竹原 敬二

昨年度は、“国立大学の法人化とは何か？新しい経営ボードは、何をなすべきか？”といったテーマを自問自答しながらも、積極的に諸課題にチャレンジした1年でした。

28年間経済界にいたものとして、この1年の最大の新しい収穫は、“大学”という存在への正しい理解であったと思います。経営ボードは、そういった研究者学生が、落ち着いて学べる、しかも必要な時には潤沢な予算と環境を、いかにして提供できる仕組みをつくれるか、が役割です。しかも、国の財政は逼迫しておりますし、社会保障コストが益々膨れあがる国の財政状況の中で。

今年の担当は、昨年までの広報・総務企画室の留学生キャリアサポート室に加えまして、東大基金を大規模に集めるための渉外本部と一般学生向キャリアサポート室、職員組織活性化のための制度改革となります。

国立大学の法人化の成功のためには、様々な面でのマネジメント改革が必要です。まだまだ力不足ではありますが、教職員の皆様と力を合わせて、東大がさらに世界トップの大学力を持てますよう、精一杯努力する所存です。何かお気づきの点ございましたら、どうぞお気軽にご一報ください。

役員退任の挨拶

総長退任の挨拶

前総長 佐々木 毅

総長退任に当り、お別れの挨拶と若干の所感を述べさせていただきます。なお、以下の所感はいくまでも私個人のそれであり、役員会の公式見解といったものではなく、ましてや東京大学の公式見解といったものではないことを予め申し上げておきます。

私の総長任期中に国立大学法人化という歴史上の大事業に遭遇することになりましたが、大混乱もなく最初の年度を送ることができました。そこで第一に、この間における理事や副学長の方々を始め、部局長の方々、教職員の方々のご協力に対し、厚く御礼申し上げる次第です。一昨年七月に法人化作業の開始に際して評議会から一定の授權をいただきましたが、こうした学内の支持が困難な移行作業の遂行にとって極めて大きな支えになったことは改めて述べるまでもありません。

しかし、なお幾多の課題が山積しております。そこで第二に、国立大学法人制度をめぐる問題状況についての私の認識を申し上げたい。何よりも、具体的な諸問題について政府との関係が多く不安定要因を抱えております。これは効率化の問題が今後どう展開するかといったことに止まるものではありません。過日の授業料標準額の値上げに見られるように、大学の経営の自主性や自律性を謳う制度を創設しておきながら、他方で大学の最も根幹的経営判断であるはずのこの件についてショート・ノートで政府が一方向的に決めてしまうといった問題です。国立大学法人にとって政府が不安定（化）要因であるという事実はそう簡単には変わらないとみるべきかと思えます。それだけに政府に働きかけ、せめて当方にとって好ましい方向に不安定化してもらう必要が出てくることでしょう。

政府との関係は他の側面でも多くの課題を抱えています。物品の購入などに見られる規制は是非とも見直されなければならない点です。また、政府から出資された土地などの活用についてがんじがらめの規制がかけられています。こうした規制は、それなりに潤沢な予算が政府によって常に確保されているという前提とセットになっていたはずであり、効率化や経営の見直しを国立大学法人に求めている現実に即してみればこうした規制は明らかに異質な残存物といわざるを得ません。こうした仮定と現実とが矛盾する形でない交ぜになった制度設計では国立大学は結局のところ疲弊し、衰弱することになるでしょう。こうした乖離や矛盾は早急に合理的な形で解決されなければならないと、到底次期中期計画時点まで待っているわけにはいかないと考えます。

政府や社会との関係でもう一点指摘しておきたい点があります。それは大学という組織に対する無知や無理解が依然として極めて深刻なことです。何故、国立大学法人であって独立行政法人でないのかといった基本的な論点は大学内では周知のことですが、社会においてこの区別を理解している人々は極めて少ないのが実情です。大学を総長が研究テーマを決め、教員に対して指令している組織のように思い込んでいる人が実に多いのです。産学連携や評価をめぐる混乱の原因もここに求められます。学問の自由や大学の自由に対する理解はほぼ存在しないと考えるのが最も妥当な現状認識かも知れません。従って、こうした理解の欠如を基にした政策などが資金の配分と結びついて立ち現れることをそれなりに覚悟しておかなければなりませんし、その場合、大学という組織に対するわれわれの確信が問われることとなります。学内においてさえ現在の東京大学を独立行政法人であるかのように語る言葉を耳にすることを考えるとわれわれの足元は決して磐石とは言えないでしょう。このことは蛇足に聞こえるかも知れませんが、四年間総長を務めてきた人間の実感としてお聴きいただきたいと思った次第です。

第三に、東京大学に対して若干の所感を述べたいと存じます。私が総長の時代に不十分ながらも学内が少々綺麗になり、相当な数の建物が建てられました。別に「目に見える改革」ではありませんが、アカデミック・ガウンが導入され、総長賞を初めさまざまな表彰制度の定着が進みました。これらは東京大学の大学としての一体性を目に見えるものにする手段でもあり、バラバラな東京大学からの脱出を計る一つの試みでした。法人化を含め、この四年間の私の仕事はこの一体性の涵養に尽きると言っても過言ではありません。しかしこの課題はなお道半ばであり、今後とも鋭意継続していただくようお願いいたします。

同時に、この数年の間に東京大学に対する国際的評価がかなり安定したことは大きな財産であったと思います。これは、不当ないい加減な評価から自由になっただけのことでしょうが、これによって将来の活動に対する安定した出発点が確保され、目標なり課題なりが明確になったという意味で大きな出来事であると確信しております。こうした認識を教職員は元より、学生や卒業生の間にも広め、更には国際交流などを通して有効に活用し、その一体性と卓越性の涵養に役立てることは大事な次のステップになることでしょう。

勿論、全てが順風満帆というわけにはいきません。先に国立大学法人について述べたような課題は東京大学についても当てはまります。「東京大学は大丈夫でしょう」などといった外部者の気休めの言葉に惑わされないよう、くれぐれも注意することが肝要です。総長在任中私

の念頭を常に離れなかったのは、「どこに本当に東京大学の味方をしてくれる人がいるのか」という不安と疑問でした。こうした点について常に謙虚に思いを致し、真摯な努力を続けなければ、この巨大大学を維持し、存続させていくことは困難であると考えべきです。この点でなお極めて呑気な教職員が少なからず見られるのは否定しがたい現実です。実際、財務的にも東京大学は厳しい危機的な状況にあることを片時も忘れてはなりません。いつかこの現実と意識のずれが深刻な問題を発生させるのではないかという不安が絶えず私の頭をよぎります。その意味で教職員と法人との関係についてはなお幾多の難題が前途に横たわっていることを認識すべきだと思います。

国立大学法人東京大学の将来について私は格別楽観しているわけではなく、格別悲観しているわけでもありません。全てはこれからの努力にかかっているからです。ここでは大小二つの課題についてだけ言及することにしめます。

第一は教育と学生に関わるものです。東大憲章は確固とした人材養成の目標を掲げておりますが、教育の現場においてそれがどう実現されているのか、そのためにどのような措置がとられるべきかについては、依然として課題が沢山あるように見受けられます。狭い意味での学力問題は大学院を含め今や無視できないものとされていますが、どのような具体策を講ずるのかについて思い切った議論を始めるべき時期だと思います。大学院重点化の結果、教育の目標が知らず知らずのうちに研究者養成に傾斜しているように思いますが、それだけではわれわれの目標とする東京大学の教育理念は実現できません。従って、教育に対する教員の評価と、学生や社会の評価との慎重な比較検討のメカニズムを組み込むことは教育改革にとって避けて通れないプロセスであると思います。また、サイズの問題も検討の対象から外すわけには行きませんし、入試のあり方についても抜本的な思考実験を始めるべきでしょう。学生の勉学環境の整備について施設面で課題が山積していることは当然として、何よりも「教員のための大学」が決して直ちに「学生のための大学」ではあり得ないこと、その意味での緊張感を教職員が持ち続けることが何よりも肝心です。そうした意識改革なしには早晩憂慮すべき事態が訪れるのではないかと心配されます。

第二はやや細かいことになりますが、私以外には発言しにくい問題について一言言及しておきます。それは総長選考に関わるものです。先ず、現在の代議員会は廃止し、教育研究評議会とその一部拡大組織によってその役割を代替すべきであると考えます。多くの教職員を煩わすことなくその意向を反映させるにはこれで十分でしょう。また、総長選考会議と役員会との関係については、

単純に切り離すだけでは無理があることが改めてはつきりしました。何故ならば、法人全体の状況と課題について最も熟知している人々を全て排除してしまうことは候補者選定にとって好ましいことではないからです。従って、何らかの工夫を行うのが至当であると考えます。また、候補者の選定は機械的な作業というよりは綿密な長時間にわたる検討を要する作業であることを考えると、余り多数の人々に多くの負担を求めるのは現実的ではありません。この意味で総長選考会議のサイズや運営については見直しが必要なように思います。次回の総長選出に先立ってこうした事項について早急に検討と見直しが必要であることを強く希望します。

最後に、新総長の下、東京大学が新たな発展に向けて着実な歩みを続けられることを祈念してお別れの言葉と致します。長い間どうもありがとうございました。



退任のご挨拶

前理事（副学長） 桐野 高明

法人化の前後一年間、副学長（理事）として財務と病院を担当しました。構造的に最も大きな財務上の変化は、従来の国立学校特別会計から運営費交付金方式に移行したことでしょう。これまでは、それぞれの研究科・学部から専攻、果ては分野まで、文部科学省の担当課と太い糸や細い糸でつながっていて（どちらが操り人形で、どちらが人形使いかは議論のあるところでしょうが）、大学全体の予算という考えはあまり必要がなかった所に、にわかには大学全体の人件費と物件費を部局に「配分」する必要が生じました。そこで、財務担当としては、人件費の採用可能数管理方式と物件費配分の基本方式を全学的に合意を得ながら作り上げることにまずは努力しました。幸いにして、全学的な了解を得て、現在その方式が使われています。今後政府から投下されるリソースが徐々に減少する中で、東京大学の活性を損なうことなく教育研究が伸びていくために必須の作業であったと思います。また、平成17年度からはもともと間接経費の付いていなかった外部資金に対して研究支援経費を10%負担していただくことになりました。東京大学が繁栄するためには、全体としておこなうべき事業が多く、このために資金の確保が是非とも必要となってくるからです。最終的には全て全学に還元される事業ですから、ご理解をいただきたいと思います。附属病院は、ほぼ当初の財務上の目標を達成できて、財政的には非常に良好な状態にあります。永井病院長を先頭として、病院改革も着々と進んでいます。しかし、政府の課す経営改善係数があまりに過酷であることは、多くの有識者のご指摘のとおりです。全学のみなさまには、今後とも附属病院へのあたたかいご支援をお願い申し上げます。この二年間で、国立大学法人化東京大学は無事船出ができたと思います。小宮山新総長のもとで、次の4年間が輝かしい東京大学への航海となりますように、こころより祈念いたします。

当番を終えて

前理事（副学長） 渡辺 浩

学問研究においては、何かしら、これまで人類の誰も気づかなかったことを発見し、あるいは発明しなければならない。したがって、その発見・発明の内容を事前に指示できる人はどこにもいない。それができるなら新発見ではなく、新発明でもない。特に偉大な発見・発明は、その当事者にとっても往々思いがけない形で実現するようである。したがって、学問研究を学問研究たらしめるには、研究者自身の自由な発想・着想と努力とにまかせる他はない。他の誰も（いかなる権力者であれ、いかなる人気者であれ）、「正しい」研究方法を指示したり、強制したりすることはできない。それは（時に反知性主義者たちがいまいまいそうに思い描く）偉ぶった学者の特権ではなく、この世に学問研究があるべきであるならば、なくてはならない条件なのである。

同様に、誰が優れた数学者であるかを判断できるのは、数学者だけである。誰が優れた経済学者であるかを判断できるのは、経済学者だけである。だから、大学のような学問研究組織における研究者の人事は、その分野の研究者のコミュニティが自ら労して審査し決定する他はない。権力者の好みや素人の人気に従うようでは、組織の目的は果たせない。

同様に、その中において、どのように制度を動かすか、どのように内部規律を保つか、そして何をどう教育するかといった、学問に直接かかわる決定は、研究者自身しなければならない。組織の中核は、金を出す側も口の出しようがなく、出すべきでもない。それが、学問が自由を必須とするものの論理的帰結としての大学の自治の意味であろう。ここにおいて、自治は自由の同義語である。

したがって、大学に教員として勤務する以上、研究と教育に加え、この自治に関わらなければならない。大学の管理・運営・経営に参加しなければならない。そこに（研究と違って）心躍る楽しさはないとしても、逃げてはならない。無論、教授会には出席しなければならない。部局や全学の様々な委員も務めなければならない。そして、研究に集中する期間があるのと同様に、時には（場合によっては何年か）管理・運営・経営に専念しなければならない期間もありうる。それは、小学校のクラスで掃除当番が回ってきたあの時と、同じようなものだ。

——私は、概ね以上のように考えて、この約2年間、ほぼ一切の研究を放棄して働きました。自分では一生懸命やったつもりですが、その評価は、まずは全学の同僚たちにさせていただく他ありません。そして私は今、部局の一教員としての静かな生活に戻ります。

この間、誠実に協力して下さったすべての職員の方々に、心からお礼を申し上げます。

災い転じて福となす

前理事（副学長） 林 良博

楽天的な性格が幸いして、法人化という厳しい環境にもかかわらず、それほどの苦もなく理事・副学長を1年間勤めさせていただきました（おそらく誰か別の方が、わたしの分まで苦勞されたのではないかと思いますので、ここでお詫び申し上げます）。

思い起こせば2年前。学内広報に掲載された農学部長退任挨拶で「行財政改革の一環としての国立大学法人化には、あくまで反対です」と述べましたが、今もその考えは変わっていません。日本の高等教育にける国費の貧しさを見れば、いま高等教育に対する国費を減額することに理があるとは思えないからです。しかし悲しいかな、法人化というケージの中でしか生きられないわたしたち大学人は、ハムスターが必死で車を回すように、平成17年度からの運営費交付金減額に備え、どのような効率化が可能かを考え、行動に移すことを第一に選択せざるを得ません。

組織が効率化を実行する場合、「弱いもの、小さなもの」が切り捨てられるという結果を招きがちです。そうではない道を東京大学が選択できるかどうか、それはひとえに東京大学の見識に係っておりますが、これまでもそうであったように、これからも東京大学は高い見識を持ち続けると信じております。

東京大学が国立大学としての優れた特性を保持し続けるならば、法人化は国立大学であったときの問題点を見直す良い機会となり、今後のさらなる発展をもたらす契機となります。研究重点大学の名の下に、教育を軽視しなかったか。性悪説に遵って、無意味に書類と印鑑を増やさなかったか。自室を整備することに熱心なあまり、公共スペースを整備することを怠らなかったか。光熱水料が国民の税金で賄われていることを忘れていなかったか。国際水準の大学とは、論文を英語で投稿するだけでなく、学内案内板が英語で表記されている等、外国人にとって快適な空間を維持している大学であることを忘れていなかったか。こうした問題点を解決し、世界に冠たる大学として東京大学が発展し続けることを祈っております。

退任にあたって

前理事（副学長） 藤井 敏嗣

国立大学の法人化が、行政改革の一環であったことは大学関係者には周知のことでした。しかし、社会にはあくまでも大学改革として受け取られ、結果として法人化が断行されることになった背景には、大学の実態を社会や政策責任者に伝える努力が足りなかったという現実があると思います。更に、法人化後は、複数の機関により大学の評価が行われることが法律で決められ、評価の結果がその後の運営費交付金の算定に反映される事になっています。

このような状況を受けて、就任当時から、私は広報・評価担当として、正当な評価を受けるためには大学の内実とその活動を社会に正しく理解してもらうことが不可欠であり、そのための作業が広報であるという主張をしてきました。その考えは今でも変わっていませんが、この1年の経験を通じて、言うは易く、行うは如何に難しいかを身にしみて感じています。

なぜ難しいかという点、第一に、大学に対する世間の理解は大学人の予想をはるかに超えて、実態と異なるものであり、無知や無理解が依然として深刻なのです。総長の退任挨拶にもあるように、大学における研究者の研究テーマを総長が指令しているかのように思い込んでいたり、あるいはそのようにあるべきだと考えている企業人が大変多いという事実を我々は直視する必要があります。社会のこの無理解を克服するための広報活動は容易ではありません。

第二に、大学の活動のコンテンツは部局にあるのに、本部・部局間のコミュニケーションが不足しているために、東京大学の活動として効果的に発信されないという現実があります。多くの研究者には東京大学の人間だという意識がほとんどなく、部局の人間という意識しかありません。「東京大学のために」という発想がそもそも希薄なのでしょう。しかし、法人化後、評価されるのは、個々の研究者や部局ではなく、東京大学なのです。社会に対する東京大学の存在感が薄ければ、部局とて安泰ではないのです。部局あつての東京大学という構図はもはやありえないと思います。

学内コミュニケーションを活発化して、大学としての一体感を持ち、その活動を社会に広報していくことが、法人化後の大学の自由や、研究の自由を確保する上で重要なことだと思っています。そのための道作りを考えた1年でしたが、まだまだ実現には程遠く、わが身の非力を感じた1年でもありました。これからは部局の一教員として、微力ながらも東京大学の発展に貢献したいと思います。

平成16年度卒業式行われる

平成16年度卒業式が、3月25日（金）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。式典に先立ち、総長、理事、副学長、学部長及び学部代表教員等が、アカデミック・ガウンを着用し構内パレードを行った。

式には、約2,838名の卒業生（卒業者数3,250名）とその父母など約3,134名（いずれも2回の合計）が出席した。

総長をはじめ、理事、副学長、当該学部の学部長、代表教員及び、来賓のカロリンスカ研究所ハンス・ヴィクセル前所長、大江健三郎氏、経営協議会学外委員、学友会役員、当該学部の同窓会等代表が壇上に列席し、1回目の理系学部は9時00分、2回目の文系・教養学部は11時10分の開式となった。

また、父母控室である法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室にはモニターを設置し、大講堂での式典の様相を放映した。

式は2回とも、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、小宮山理事・副学長から学事報告が行われ、佐々木総長から、各学部卒業生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から卒業生に告辞が述べられ、理系学部はカロリンスカ研究所ハンス・ヴィクセル前所長、文系・教養学部は大江健三郎氏からご挨拶をいただいた後、最後に音楽部コールアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の合唱をもって式を終了した。

なお、2回目の式終了後、14時00分まで卒業生及び父母などに、大講堂を開放した。



平成16年度卒業式

卒業式総長告辞

今日ここに卒業式を迎えられた法学部、文学部、経済学部、教養学部、教育学部（医学部、工学部、理学部、農学部、薬学部）の皆さんに対し、東京大学の教職員を代表して心からお祝いを申し上げます。また、皆さんの勉学をこれまで支えてこられたご両親を初め、多くの方々にもお祝いの言葉を述べるとともに敬意を表したいと存じます。

ここにいる皆さんのうち、勉学に熱中する余り四年以上在学した人を別にすれば、皆さんは私が総長に就任した年に東京大学に入学しました。四年前、新入生の皆さんと新米の総長との出会いがあったわけです。入学式において私は、安定が過去のものとなり、「歴史の裂け目」に遭遇した皆さんには挑戦の気持と高い志を持って人生を生き抜いていく以外に道がないということを語りました。その後、国立大学について法人化が現実のものとなり、私自身も些か「歴史の裂け目」というべき事態に遭遇することになりました。その意味では今日は皆さんにとってのみならず、私にとっても一つの大きな区切りの日です。私は過日の教育研究評議会において法人化を含む自らの総括を述べましたが、皆さんもまた今日という大きな区切りに際して自らの学生生活の実績を省み、これからの人生への新たな決意を固めていただきたい。

今日私は皆さんに対して二つのことを述べたいと思います。第一は、皆さんがこの数年間過ごしてきた大学という組織体と社会との関係です。大学は自由に物事を探求し、自由に発信し合うことができる類い稀な組織です。富が幅を利かせたり、権力が日常的に行使される組織とは違い、人間の知的能力の発揮そのものを尊重する組織体です。こうした知的探求がどのような役に立つのかといったことはあくまで第二義的な事柄に属しています。いわば知的な贅沢と物質的な痩せ我慢とがない交ぜになった、恐ろしくフラットな組織体と言ってもよいでしょう。官庁や企業の組織原理に親しんできた人々にとってこれは正に「恐るべき」組織です。従って、大学を離れた多くの人々はこの組織体を「不可解なもの」と感じつつ、学生時代の自由に懐かしさを覚えることとなります。ここに大学という組織体の尽きない魅力があるとともにその特異性もあることとなります。

社会は大学のような組織を許容するとしても、大学に学ぶ者が専ら大学の中で生きることを期待しているわけではありませんし、また、社会全体は大学とは大きく違った原理によって動いています。ここに大学の社会的な特異性と限界があります。皆さんはいずれ大学を出て、社会のさまざまな組織に入り、大学とは違う組織原理を持つ社会関係の中で活躍することが期待されています。皆さんの中には将来ずっと大学の中で生活したいと考え

ている人もいるかも知れませんが、大学という組織体の社会的特異性と限界を見据えた人生設計でなければ致命的なミスを犯すことになりかねません。

皆さんにとっての課題は大学と違った組織において活動するかどうかではなく、「どのように」活動するかにあります。この「どのように」が完全にマニュアル化できない以上、そこには人間の知的感覚と知的探求力が働く余地が必ず存在します。特に、「歴史の裂け目」においてはマニュアルは役に立ちませんから、それだけ大学に内在していた「不可解なもの」がますます重要な役割を果たすこととなります。かつての安定していた時代以上に、個人の力量と大学生活の質の持つ意味は個々人の人生にとって大きなものになってきています。当然のことながら、東京大学の卒業生はかつての安定していた時代以上に「歴史の裂け目」においてこそ、その力量と卓越性を十分に発揮しなければなりません。このことを銘記していただきたい。

第二は、「歴史の裂け目」についての追加的な見解です。四年前、「歴史の裂け目」と私が言った時、それは経済活動のグローバル化とわれわれの生活環境の急速な構造変化を主として念頭に置いていました。その後もこの変化はますますスピードアップしているように見えます。そして東アジア地域は今や世界経済の一大中心地となりました。しかし他面において、この地域の政治的脆弱性はますます目立ってきました。経済的な相互依存が政治的協調を可能にする一つの重要な基盤ではありますが、経済的繁栄が政治的自己主張に大きな拠り所を与え、それが新たな政治的緊張を招くこともまた歴史の一つの現実であります。従って、余りに経済主義的に事態を捉えようと判断を誤ることとなります。

私にとって最も気になることは総じて東アジア地域の政府の弱体化がじりじりと進行しつつあるように見えることです。政府の弱体化の背後にはリーダー層のメルトダウン現象という深刻な現実があります。一般に政府の弱体化は民主化によって起こることもあるし、経済発展の帰結として起こることもありますが、確かなことは資本主義自身にはこうしたリーダー層を作り出す能力がないということです。かくして政治的ナイーブさといわゆるポピュリズムになかなか歯止めがかからなくなり、それがポピュリズムの相互増幅のメカニズムにつながるようになります。その意味で、この地域が世界で最も政治的緊張の高い地域になるのではないかと、という懸念は決して杞憂とはいえません。

こうした政治的緊張を沈静化するためには結局のところ時間が必要となります。つまり、世代の交代とともに政治的経験の蓄積、政治的成熟の醸成が必要です。幾多の戦乱を潜り抜けてきた欧州諸国などと比べて、この地域の人々の政治的経験はおお極めて乏しく、そうした経

験を踏まえた政治的英知のストックは十分ではありません。これを政治的ナイーブさで無理やり代替しようとするれば、事態は却って危険なものになります。時間がかかるということは皆さんの世代にこの難問を担ってもらわなければならないということを意味します。その際、政治はあくまでも相手の存在を前提にして問題の解決を勇気をもって計るしたたかな実践活動であること、こうした活動に対する確かな感覚を涵養すること、これなしには単なる時間は意味を持たないことを是非とも認識していただきたい。ここにグローバル化に止まらず、新たな「歴史の裂け目」が顔を覗かせていることを指摘し、この大問題との皆さんのこれからの長い格闘に大いなる声援を送りたいと思います。

私はこれまで東アジアの大学で講演を頼まれた場合、必ず次のように述べてきました。自らに配慮をしながら与えられた歴史的条件の中で生きていくことは一種の必然（必要）であり、問題はそれで終わってよいかということです。先に述べたように歴史的条件は各個人のあり方にとってどうでもよいものではなく、不断に再検討され、より望ましいものに変えていくべきものです。これこそ、皆さんが単に自らに配慮して生きるだけでなく、公共の事柄に配慮しつつ生きていかざるを得ないという事実なのです。公共の事柄への配慮というのはわれわれが生きていく上で必要とする基本的条件や環境について勇気を持って知的に取り組むことに他ならず、その意味では自らに対する配慮と矛盾するどころか、むしろその不可欠な補完部分というべきものです、と。

その際、公共の事柄へ配慮することに知的に取り組むことが何を意味するのかを考え、それ自身をもまた分析の対象にすることこそ皆さんにふさわしいものだと思います。それというのも、公共の事柄に配慮するということは単純なことでもなければ自明なものでもないからです。これは基本的にオープンな知的活動の場であり、そこでは批判的精神の健全な発露こそが必須の要件であり、新しい現実を切り開く逞しい気力こそ、東京大学の卒業生に期待されることです。東京大学は東大憲章において「市民的エリート」の育成をその教育目標に掲げていますが、今述べたような意味で公共の事柄に知的に配慮することこそ、その最も基本的な条件であります。そのように、論語に言うところの「南面せしむべし」を私は現代風に解釈したいと考えます。そして、東京大学は自らへの配慮を超えて闘い続ける卒業生の皆さんにとって何時までもその精神的な故郷であり続けたいと思います。

この三月中に教養学部の教授たちが中心になって編集した『教養のためのブックガイド』という本が刊行されます。これは本学が教養をどう考え、どう捉えているかについての重要な記念碑的作品です。実は総長に就任し

た後、教養学部との間でこうした出版物について約束をしましたが、この本はこの課題についての東京大学のメッセージを伝える役割を持った特別の本です。皆さんが機会を見てこの本を手にし、東京大学への思いを新たにさせていただくことを期待したい。私が皆さんに対してこれまで表明してきた期待を担うに当って必ずや力強い精神的糧となることと信じて疑いません。

最後になりましたが、皆さんそれぞれがこうした重い課題と大きな期待を背負いながら逞しい人生を送り、何よりも悔いのない人生を送ることを切望しています。そして、大きな幸運が皆さんを待ち受けていることを心から祈念し、私の告辞と致します。

平成十七（2005）年三月二十五日

東京大学総長
佐々木 毅



告辞を述べる佐々木総長

卒業式来賓挨拶

ハンス・ヴィクセル カロリンスカ研究所前所長

Dear fellow human beings,
graduates, doctors,
professors of the renowned Tokyo
university!



Deeply honoured to be invited to stand here and give this talk I will try to give you some personal reflections about what life and future may look like. I have spent a long life as a scientist, and has been President of a renowned university, the Karolinska Institute for many years, I have been the president of Nobel Prize committee for medicine allowing an analysis of what makes a great scientist. Since 5 years I am the scientific advisor to the Swedish prime minister which has taught me the conditions under which a politician acts. Privately, I am happily married with 4 grown up children, one of which is married to a nice young man from Tokyo. My comments today will draw from my own experiences in these various positions. I will try to convey to you some thoughts that may be of some value to you, whether you remain in academy or leave Tokyo University.

Life is for many people a continuous stretch of days and nights. In a famous, somewhat sad Swedish poem an elderly man is saying: All these days that came and went, never did I realize that this was life! To catch each day, carpe diem, is a fundamental part of a happy life. Today is for you here indeed a special day, it is a day of celebrations, graduations and discontinuity. Many of you are leaving, graduating from one of the most prestigious universities in the world. Most of you also leaving the academic world and entering into an increasingly complex society. And you are doing this at a time when that society, be it regional, national or global is undergoing dramatic cultural, economical and political changes. This is clearly apparent in my own country, and I have been observing the same drastic changes in Japan. We live at a time when the number of people living on earth right now with a university degree exceeds the total number of all people with similar education living before us. In some countries now close to 50% of young people are entering universities. This means that governments all over the

world feel that they cannot continue to support universities in the same way as before, It also means that university graduates are moving from being a minority elite to something much more conventional. Statistics can be used to tell this in a more dramatic way: In Sweden right now for example 1 out of 30 of the young population will now go on to take a university doctoral degree!

For the universities this means that the dominating power of governments to support universities is gradually fading and moving more and more towards society in its many forms. Modern universities have to develop strategies how to communicate with society in general in many ways in order to obtain sufficient support for their future development. Remaining and functioning according to the old meaning of the word academy, academia, meaning above the people, that is staying separated in an academic ivory tower from society will be a sure recipe for disaster for any modern university. In many countries all this together may paradoxically mean that the greatest changes will have to take place in the most prestigious universities. Tokyo University is thus now facing a challenge crucial to handle in the best possible manner. This does also mean that the capacity of the leadership of a university to create a strategy allowing the university to successfully navigate in the future to create a future university able to increasingly control its own destiny is vital. American universities have been living under these conditions for decades, European universities are in the midst of adapting to the new situation. In my own university, the Karolinska Institute, we have over the last 10 years made dramatic changes in the constitution and in creating new strategies which the university now is using. The results have been most favorable in comparing to other universities who have stayed on the old tracks.

All these changes constitute new challenges to universities. In Japan the pressure for change is now in my mind quite dramatic and is coming from above. Government laws transforming the classical universities into something called "independent administrative units" may be considered a threat but is in my mind an enormous possibility for Japanese universities. This of course means that universities in Japan from now on will be responsible to make up their own strategy how to shape the university into an

entity efficient in handling the challenges of a changing world. This will require a new type of leadership compared to the classical academic leadership capable of gradually acting more independent of government. Never before has an understanding of the complex outside world and how to handle this been more important for deans and presidents in universities all over the world.

For those of you graduating and leaving Tokyo university society is out there looking for your competence but a lot will depend on you in finding out where the best match is for you. You are on one side well prepared via your university studies to handle the field you have been studying. On the other hand, society and especially industry nowadays may take this knowledge for granted, especially in Japan if you come from Tokyo University. At the same time, industry increasingly requires a capacity to understand and interact with other human beings. Knowledge about the human body and mind is helpful in understanding how we human beings do function and is useful knowledge in society. We now know for instance that the brains of our grandparents in part are functioning differently from our parents and our brains are also different from our parents in certain ways! How can I say so? The function of the human brain can now be studied by modern imaging technologies and we can now study how various activities of the brain change within generations. Let me give you one example: Taxicab drivers in London are not allowed to use maps when they drive around in their car, they must know the map by memory! To learn the map of London takes about two years before they can get a cab license. In the human brain a region called hippocampus contains the center for navigation. If you now measure the size of hippocampus in relation to how many years they have been taxi drivers in London there is a straight forward positive correlation—the longer the taxi driver, the larger the hippocampus! Even in adult human beings the brain is plastic, it can change according to the needs. You can also study the representation for instance of the fingers in the brain of the individual. In my brain the index finger has a larger area than my thumb. In most of you like in my children, the thumb in contrast is occupying more space in the brain than the index finger. Why? Cellular phones and videogames! When recruiting jet fighter pilots in Sweden we have also

noted that the present ones are faster in their reflexes compared to before—again because of videogames!!

So there is plasticity, a capacity to change, in our brains of a kind not known just a few years ago which can even be used to correct certain social dysfunctions by select training. On the other hand we are all prisoners of our bodies, that is we carry with us a selected behaviour pattern against other humans governed by many thousands of years of selection for the best way to live, act and react. In all societies around the world seniority has previously been linked to wisdom, the old wise men and women guiding the younger ones thereby enhancing their likelihood of survival. At the same time a study of the average age at which scientists made their seminal discoveries later leading to a Nobel Prize in medicine showed that 85% were younger than 35 years of age at the time of discovery. You will in your new jobs very likely meet with people significantly older than you are. But are such old individuals nowadays more frequently in need of learning from the young ones? Never before in the periods of human evolution has the speed of development of new technologies and the volume of new information been larger than now. This has for instance meant that many individuals of the elderly generation have significant problems with new technologies, cellular phones, computers, TV, programming etc and frequently have to ask their children (or even grandchildren) how to handle these things. We elderly try to learn but how good are we in learning, especially from younger people. Let me here tell you about my experience as a research student in a lab with a fantastic professor who took good care of us. He was coaching us, allowing us to meet visiting Nobel laureates, and he participated in all scientific seminars, listening and discussing what we students presented with significant earnestness. But sometime strange things happened. A student had presented his findings and a new theory based on these findings during a full hour seminar. The professor was there, smiling, encouraging, discussing. Then a few months later the professor came home from visiting USA, gave a seminar to tell what he had learned, and then he spoke with great enthusiasm a new fantastic theory of a famous professor at Harvard. BUT, the theory was the very same as the student had already presented in his seminar. This happened more than once and we, students, discussed whether our beloved

professor had a hole in his head or what was going on. Only some 25 years later did I realize what was actually going on. I read about a behaviour study how chimps in a group can learn new things. A machine preprogrammed to release grapefruits if properly treated was constructed-A young chimp from the group was removed from the group, introduced to the machine and taught how to do. The machine was then placed within the area of the group of chimps. All chimps gathered around the machine, the little young chimp run to the machine, made the necessary sequence of procedures and out came a grapefruit which he grabbed and run away. The big chimps pushed their way to the machine but were completely unable to figure out the necessary procedure how to get out a grapefruit. The little chimp came back, got the grapefruit etc .In a couple of days the old chimps pretended they did not care or see the machine. Now, the machine was removed, reprogrammed at the same level of difficulty, and one of the oldest chimps was taught how to handle the machine. The machine was put into the containment of the group and now all of the chimps rapidly learned the new procedure. Explanation: Chimps can not easily learn from a lower ranking chimp, but conversely, lower ranking chimps learn easily from higher ranking ones. My professor was like an old chimpanzee who had great difficulties in learning from a younger one, here a student. I fear that this is also true for me and other elderly even if we try to fight against it, that ranking and authority in relation to efficacy in learning from others is to a certain degree biologically engrained in us. Knowing about this hopefully can make us better in handling this handicap but we need help from you, younger people. In a perfect future world information and knowledge and learning should flow equally efficient in all directions, between young and old, high and low. Hopefully knowledge like this may be of some benefit in achieving this.

Let me end with some personal, subjective comments. The world is rapidly getting closer together and for many activities the "market" is now entirely global. Being brought up in different cultural conditions leave imprints in attitude and behavioural patterns for the rest of our lives. Sweden and Japan may seem different but have by and large significant components of social behaviour and culture in common. The best cars in the world with regard to

safety and performance are made by Toyota, the best trucks by Scania. They have one principle in common, let 's call it the Toyota principle. In short, the majority of the components of any new car/truck model must be "old" parts already present in a previous model. This means that the likelihood of breakdown due to technical problems is correspondingly decreased, yet the car/truck may not be as flashy as other cars yet they sell extremely well. Compare now the American more flamboyant space programme to the Russian counterpart. Reading through the statistics of errors and accidents it is clear that the American space programme has suffered a far greater incidence of errors than the Russian one. Why? Because the Americans were always wanting and asking for to make usage of the most recent, advanced technology with money no problem whilst the Russians in part due to economy, always have been trying to use "old" established technology. So how should you use your competence and knowledge in the future? Is one way of working better than the other? Is one kind of attitude to solving problems better than another? No. Plurality is superior to uniformity and individuals will increasingly be hired on the basis of their special skills and for specific projects. In science individual excellence will always be recognized even if this varies in time, in industry and public sector work in general the same is true although to maybe a lesser extent. I started my talk with a discussion of conditions of life. Let 's end with an attempt by the old Nordic Vikings trying to explain why we exist at all. Their conclusion was that man exist for the happiness of man, that we exist to make other people happy. I consider that a nice philosophy to live for.

卒業式来賓挨拶

大江 健三郎

東京大学（文科系・教養学部卒業式）のために

東京大学文科系、教養学部の平成十六年度卒業生の皆様に、お祝いを申し上げます。私も文学部フランス文学科を卒業したのですが、どのような理由であったか、卒業式には出ませんでした。

私が大学の卒業式に出席したのは、一度きりです。それは五年前のことで、ハーヴァード大学においてでした。私がハーヴァードを卒業したのじゃありません。文学の名誉博士号をいただきに行ったのです。世界中から来た同僚と並んで、長時間中庭を見渡す吹きさらしの壇の上に座っていました。

私の隣りが、言語学者のノーム・チョムスキーでした。私はチョムスキーさんの言語学と、政治的発言を尊敬しています。そのことを話そうとしましたが、私の英語の発音は貧しいのです。小さい声で話しますと、まったく理解されません。大きい声を出しますと、この日名誉博士号を受ける者たちのなかで、級長の役割を引き受けていた経済学者のアマーティア・センがジロリと私を見ます。

そこでいたし方なく、私はもらったばかりの立派な証書の裏側に、ボールペンで私のいいたいことを書きました。チョムスキーさんもそれに返事を書いてくれました。そのうち裏側では足りなくなると、表側へも書き、私らは二時間あまり会話を楽しみました。皆さんは、卒業証書をそんなことに使ってはいけません。

チョムスキーの言葉で私が感動したのは、とくにこういうものです。アメリカが広島に原爆を落したとラジオで聞いた日、フィラデルフィアのサマーキャンプにいた自分は動揺して、森に入り、ひとり夕暮まで座っていた。自分の続けているアメリカの「軍産複合体」批判は、あの数時間の十六歳だった自分の思いにつながっている——つまりかれらが原爆を作り水爆を作っているのだから、ケンザブロー。

私自身、太平洋のこちら側の森のなかで経験したことをいいました。敗戦とそれに続く占領下で、今につながる自分の生き方が始まりました。この年から二年後に新しい憲法と教育基本法が施行されましたが、まず村の大人たちが私ら子供にいったのは、いまきみたちに「自由」があたえられるが、「自由」を履きちがえてはならない、ということでした。



私は「自由」がいいと思いました。自分は自由に生きて、訪ねたいと思う世界のすべての場所に行こう、と考えました。地方の小さな村の、貧しい家の少年です。「自由」にできる面白いことなど、なにもありません。ただ、本を自由に読むことができるだけです。私はひたすら本を読んでいたのですが、不安がありました。自分は自由を履きちがえているのじゃないか、ということです。それが私も十六歳の時に、この人はすばらしい人だと思ふ学者の本に出会いました。この教授に習うということに、自分の「自由」を使おうと考えました。東京大学文学部フランス文学科の渡辺一夫教授です。

本郷に進むためのオリエンテーションで、私は初めてこの人を見ました。先生は、きみは仏文で何をやりたい、とたずねられました。あなたに習いたいだけだ、とはいえませんが。——私は知識人になりたいと思います、と答えました。まわりの同級生がみんな笑ったものです。さきに、大人たちの繰り返した、「自由」を履きちがえるな、という脅かしの言葉からの、不安のことをいいました。自分の「自由」についての考えは、個人本位じゃないか、という思いはつねにありました。それが、大学に入って不安への回答をあたえられました。

それは、渡辺さんのお友達だった政治学の丸山真男教授が書かれていた文章を読んだことからです。丸山さんは、「拘束の欠如」をもっぱら楽しむのじゃなく、「理性的な自己決定の能力」を働かせることこそ、人間らしい「自由」だ、と書いていられました。それが「新しい規範」を創造し、それによってのみ、この国に民主主義が達成されるだろう、というのでした。

私は戦中から戦後にかけて、この森の中の村に「自由」は決してなかったと知っていました。そして自分は今から「自由」な生き方をしてやろう、と考えながら、不安でもあったのです。しかし、あの時期、自分は子供ながら「理性的な自己決定の能力」を働かせていたんだ、と思いました。そして自分で作った「新しい規範」もある、と……。その思いを私はいまも持ちこたえているように思います。それがいま、憲法と教育基本法の、戦後的な基本態度、つまり多くの死者たちの思い出とともに、困難のなかで新しく生きなおそうとした日本人の態度を、若い人たちに伝えようとしている理由です。

さて、私が卒業式に出なかった日からしばらくたって、まだ桜の咲いているうちでしたが、渡辺さんから自宅に顔を出すよう、葉書が来ました。そして、きみが小説を書いてゆくのはいいだろう、しかし、小説だけ書いて五十歳になったら、寂しいのじゃないか、少なくとも永い月日を退屈して生きることになる、といわれました。そこで、これから、三年ごとに主題をきめて、つまりある作家、詩人なり思想家なりをひとり選んで、三年間はその人だけ読み続けるように、といわれました。三

年では専門家にはなれない。しかし、きみは学者になるのじゃない、小説家になるのだ。そのようにして五十歳になったら、きみは「知識人」になる道を歩き始めていくかも知れない……。

それは私が先生のオリエンテーションで「知識人」になりたいといい、同級生たちに笑われたことを覚えていてくださったのです。私はいま五十歳どころか、七十歳です。そして先生の、三年ごとに主題を決めて本を読むという教えは守りました。いまに続いています。十五人目のT・S・エリオットの三年目に入るところです。そこで自分が知識人になれたかどうか、それは私の判断しうることではないでしょう。ただ私にいえることは、ここに名前をあげた、ノーム・チョムスキーであれアマーティア・センであれ、そして渡辺一夫であれ丸山真男であれ、本当の知識人たちを敬愛しつつ、七十歳まで生きることができた、そして自分の人生は退屈なものではなかった、ということです。

私はいまこの国は、六十年前の敗戦と再出発の時期に匹敵するほどの転換期にあると思います。そこであらためてこの国の人間が「理性的な自己決定の能力」を働かせ、国内的にも国際的にも「新しい規範」を提示することを必要とされていると思います。それなしでは、六十年前、数百万もの内外の死者たちの目に見すえられつつ行った新出発が、ゼロにひとしいものとなる、そのような危機であります。

私は、文科系と教養学部の、とくに文科系の、といたいですが、その卒業生の皆さんが、これから自分を知識人としてきたえてゆこう、という決意をされることを期待します。ハーヴァード式に言えば、本当の知識人への長い道のりへの、あなた方のcommencementを思い、心からお祝い申し上げます。

2005. 3. 25 大江健三郎

平成16年度学位記授与式行われる

平成16年度学位記授与式が、3月24日（木）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。式に先立ち、総長、理事、副学長、研究科長及び研究所長等がアカデミックガウンを着用し構内パレードを行った。

式には、約2,237名の修了生（修了生数3,719名（修士課程2,718名、博士課程1,001名））とその父母など約2,358名が出席した。

本年の授与式も、修士課程と博士課程ごとの2回に分けて行われ、修士課程学位記授与式は、昨年度と同様に、父母控室である法文2号館31番教室、3番大教室及び1番大教室に、モニターを設置し、大講堂での式典の模様を放映した。また、博士課程学位記授与式は、父母等も上記控室の他、一部大講堂に入場して行われた。

総長をはじめ、理事、副学長、各研究科長、各研究所長及び、来賓の藤嶋昭特別荣誉教授、戸塚洋二特別荣誉教授、経営協議会学外委員森巨元総長が壇上に着席し、1回目（修士課程）は9時10分、2回目（博士課程）は11時00分に開式となった。

式は、まず、音楽部管弦楽団による、バッハ作曲の「管弦楽組曲第一番」が演奏され、壇上列席者の紹介があった後、渡辺理事・副学長から学事報告が行われ、佐々木総長から各研究科の修了生代表に、順次、学位記が授与された。

続いて、佐々木総長から修了者に告辞が述べられ、修士課程は藤嶋昭特別荣誉教授、博士課程は戸塚洋二特別荣誉教授からご挨拶をいただいた後、最後に音楽部コーラルアカデミーによる東京大学の歌「大空と」の合唱、出席者全員による同じく東京大学の歌である「ただ一つ」の合唱をもって式を終了した。



パレードの様子

学位記授与式総長告辞（修士課程）

今日ここに修士課程を終えられ、学位記授与式に臨まれた皆さんに対し、東京大学を代表して心からお祝いを述べたいと思います。併せて、これまで皆さんの勉学を支えてくれたご家族を初め、多くの方々のご支援に対し、深甚なる敬意を表する次第です。特に、外国から本学に留学し、幾多の困難を乗り越えて今日の記念すべき日を迎えた留学生の皆さんに対しては、一層大きな拍手を送りたいと思います。

皆さんの中には直ぐに社会に出て活動を始める人もいるでしょうし、これから博士課程で更にその研究に磨きかける人もいるでしょう。あるいは、外国に出かける人もいるでしょうし、祖国に帰って働くことにした人もいるでしょう。いずれにせよ、皆さんが輝かしい未来を手に入れるためにはこれまで以上に粘り強い努力と、果敢な挑戦が求められることは言うまでもありません。修士課程において培った自らの実力に足場を置きつつ、着実に新しい可能性を切り開くべく、それぞれに積極的に前進されることを祈ってやみません。

皆さんは学部学生と比べ、修士課程においてそれぞれに専門的知識に接し、少なくともそのある部分については先端的知識に触れ、相当の自信をもって語れる状態にあると思います。そして今や、そうした専門的知識は皆さんにとって自らの存在に匹敵するような重い意味を持っていることでしょう。しかし率直に言えば、こうした知識は早晩色あせる可能性が高く、不断に更新されることによるのみ辛うじて現在の水準を維持できるようなものでしょう。その意味では果敢ないものであり、それと自らの存在とを一体化するというのは些か心もとないことであると言わざるを得ません。つまり、知識はそれが相当程度専門的に卓越したものであれ、多くの場合それだけで一人の人間の存在を支え続けるだけの力を持ち合わせていないこととなります。大学院に進学する者の数が急速に増えた現在、これは偽らざる現実でしょう。しかしこれは何も嘆かわしい現実を意味するものではありません。それは唯、皆さんのこれからの人生と身に付けた専門的知識との関係を改めて見直してみる必要があるというだけのことです。

先程述べたことは、修士課程で身に付けた知識の間尺に合わせて人生を送ることはほとんど不可能であるということですが、それは皆さんが獲得した知識そのものよりもむしろ知識の獲得を可能にした皆さんの能力に注目すべきだということを意味します。個々の知識が枝葉であるとすれば、この能力は根であり、太い幹に相当します。この枝葉に引きこもり、それだけで手際よく人生を送ろうとすることは先に述べたように現実性を持たないのみならず、皆さんが培ってきた能力全体を考えると誠

に勿体無いことであり、社会的にも大きな損失です。より多くの枝を繁らせる能力を持った人間はより大きな幹と逞しい根を持っているはずで、その可能性を十分に発揮して社会に立ち向かい、社会に新しい波を起し、社会を変えていくことこそ、これからの皆さんの生き方の基本でなければならぬはずで、あるいは、新しい知識の領域に挑戦し、社会に立ち向かう専門的能力を一層磨くこともそう難しくないでしょう。この中には博士課程で専門的研究者を目指す人も多数いると思いますが、その場合でも社会との関わりを忘れて枝葉の生活に退却するのではなく、常に自らの人生の可能性を広く探求し続けることが基本にならなければなりません。そうした大きな可能性を持った人材として皆さんの将来に大いに期待しております。

20世紀はその科学技術によってわれわれの生活に大きな変革をもたらしました。平均年齢をとってみても、日本人は半世紀の間に約1.5倍長生きするようになりました。情報化が人間と人間との関係を如何に変え、グローバルな社会構造に大きな影響を及ぼしたことは誰でも知っていることです。それは文系、理系といった区別けの見直しを迫りつつあります。勿論、科学技術は人間の大量破壊にも手を貸しましたし、全てがバラ色というわけには行きませんでした。しかし何か困難が起こるたびに事態打開の切り札として科学技術への強い期待が表明されました。この数年の経済停滞の際に見られた日本の世論の動向をみればそれは明らかです。

ところがここに大きな問題が隠されているように見えます。それは社会のマネジメントの技能を事実上科学技術によって代替させようとする強い惰性の存在です。すなわち、マネジメントの役割を担う立場にある人々が社会情勢や国際情勢の変化に対応して自らのマネジメント能力を不断に磨くという努力を怠り、あるいはそうした能力をそもそも欠いており、そのことに俗にフタをして科学技術に事態打開の機能を押し付けるという傾向がそれです。そこから何が起こるかといえば、単に「歴史は繰返す」だけではありません。何よりも、科学技術がその成果をあげればあげるほど、この化石化したマネジメント集団とその組織が温存されることとなります。これが最大の問題です。

日本ではこうした社会のマネジメント能力を涵養するのは従来文系の任務とされてきました。それは彼らが社会についてより多くを学び、マネジメントの方法や手法についてそれなりの専門的知識を持っていると考えられたからです。しかし周知のように、文系の大学院教育はその深い社会性にもかかわらず、完全に研究者養成にこれまで限られてきました。そこから新しい人材が社会のマネジメントの世界に輩出するのを警戒しているのではないかと疑いたくなる光景でした。法科大学院の

発足がこうした歴史を変える大きな転機になるかどうかはなお予断を許しません、公的部門のマネジメント能力の停滞はますます酷くなることはあっても改善の兆候は見られません。

社会のそれぞれの部分、特に、公的部門においてマネジメント能力を高めることはいわゆる文系だけの問題ではありません。現実には自らの努力の成果が生かされることを期待し、自らの努力に誇りを持って生きようとする全ての人が関心を持たなければならない課題です。こうした課題との取り組みにおいては、しばしば明白な解も解に向けての明快な手順も見当たりません。また、時間のファクターを入れない議論は意味を持ちません。これこそ枝葉のノウハウを身につけた人では担えない、知的に太い幹とがっしりした根を持った皆さんのような人材が率先して取組むべき課題です。

それぞれの局面において努力していさえすれば「どうにかなる」という発想は戦後日本の繁栄の中で確かに一定の現実味を与えられましたが、そうした時代は終わったようです。犯罪が増えると自衛が必要になるように、今や無防備でも「どうにかなる」と考える人はほとんどいなくなりました。こうした中でマネジメントの責任者が相変わらず「どうにかなる」と言っていれば信用を失うのは当然のことです。今や、「どうにかしなければならぬ」段階にわれわれはいるというべきでしょう。誰にも遠慮は無用です。大学も決して聖域ではありませんから、これに対しても遠慮は無用です。それぞれ入り口は違うかもしれませんが、是非ともこのマネジメント能力の向上という大テーマにそれぞれの活動の局面において取組んでもらいたい。それは皆さんに新たな刺激と友人をもたらし、より生きがいのある人生へと導くものであると私は確信しております。

最後に、皆さん一人一人の将来が幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られるよう、そして、東京大学で過ごした年月が皆さんにとって忘れがたい経験であったことを祈念して、私の告辞と致します。

平成十七（2005）年三月二十四日

東京大学総長
佐々木 毅

学位記授与式総長告辞（博士課程）

博士号を取得し、本日この式場に参加されている皆さんに対し、先ずは心からのお祝いを申し上げます。おめでとうございました。博士号の取得は学歴の頂点を極めることであり、皆さんの研鑽の道は長く、しかも厳しいものであったと思います。それを乗り越えることができ

たのは何よりも皆さんそれぞれの学問に対する真摯で熱意ある態度の賜物ですが、そうした長きにわたる厳しい勉学と研究を支えてくれたご家族や支援者の方々に対しても、皆さんとともに感謝の気持ちを表したいと存じます。

特に、外国から東京大学に学び、博士号を取得された方々については、その非常な努力と真摯な研鑽に対し、一層の祝意と敬意を表明したいと存じます。

今や高度な専門的・先端的知識の担い手に対する社会の関心や期待は、いわゆる知識基盤社会の到来と経済のグローバル化の中で日々ますます高まっています。世界各国政府はこうした人材の育成を大きな戦略的な課題と位置付けており、優れた名声のある大学作りに強い意欲を燃やしています。また、企業のこうした人材をめぐる争奪競争は激しさを増すものと考えられています。ここに博士号を取得された皆さんは正にこのような知識基盤社会化現象の申し子であるとともに、その先頭に立つべき人材として期待されているわけです。皆さんの活躍すべき舞台はそれこそグローバルであります。東京大学は世界有数の研究重点型大学として知識基盤社会に皆さんを送り出すことを誇りにしています。どうぞ本学で培った実力を遺憾なく発揮して輝かしい前途を切り開いていただきたい。

ところで博士号取得者に対する社会的期待の高まりは皆さんの環境を複雑にしたことも否定できない事実です。かつてのように専ら将来の研究者という特定の職業従事者の養成を念頭においていた時代にあっては、こうした社会的期待の広がりがない反面、学界というはっきりとセグメント化された領域のことを念頭におくだけで十分でした。量的なミスマッチはあっても質的に複雑なミスマッチはありませんでした。これに対して高度先端的知識の必要性が社会全体で高まったということはこうした狭いセグメントから自由に活躍する機会が一般に大きく広がったことですが、同時にそれは個々の人間の知識や力量と社会の要請との間の掛け橋をどうするかという問題を惹起することになります。いわば抽象的期待と具体的能力とが向かい合っているだけではすれ違いに終始することになりかねず、この間を結びつける機能を誰がどのような形で担うかが問題になります。

その結果、個々人にとって機会が広がった一方で、かつてと比較ならないほど状況が複雑になり、時には手に余る恐れも出てきました。これにどう対処するかについて万能薬があるわけではありませんが、基本ははっきりしています。それは皆さんが、折にふれ、自らと社会との接点を常に確かめ、念入りに点検していく作業を続けていくことです。これはどのような人間であれ、自らの力量を十分に発揮し、充実した人生を送る上で不可欠の作業であって、皆さんもそれを免れる特権を持っている

わけではありません。受身的に対応するだけでは社会の期待は個々人にとって抽象的なものに終るかも知れませんから、自ら意欲的に社会との接点を求め、積極的に人生を選択することを試みていただきたい。それによって後から続く世代に新しい可能性を指し示す尖兵になっていただきたい。

私がここでこのような期待を表明するのは、何よりも皆さんには積極的に人生を選び、しかも、それをやり抜いていくだけの力量があると信ずるからです。博士号の取得に至るまでの長い粘り強い努力と卓抜な知的能力を実証した皆さんは、こうした成果を達成するに足るだけの大きな人間的基盤を持っています。東京大学の博士号は専門的知識における卓越性を証明するものであるに止まらず、こうした人間的力量の持主であることを宣言するものです。皆さんが自らのこれまでの学問的成果に受身的に立てこもらない限り、新たな挑戦を試み、そこで立派な成果をあげるだけの力量を持っていると私は信じます。この可能性を自ら封殺するような人生を送らないで欲しいのです。

このような期待を表明するのは第二に、われわれの社会や人類が多くの人間的難問を抱え、高度な知識と専門的知識の持主の活躍を待望しているからです。国際競争力の涵養に忙殺されている企業のみならず、社会と人類が皆さんのような人材の活躍によってさまざまな問題に解決の糸口が見出されるよう、大いに期待しております。大学の活動の社会への還元は産学連携に限られるのではなく、何よりもそれは有為な人材の社会への供給を通して行なわれます。その意味では皆さんには学界以外の領域にも進出していただき、何よりも国際社会において諸外国の精鋭と伍してその実力を発揮することが期待されているのです。

私は今日ここで専門的・先端的知識の探求における皆さんの更なる前進について余り語りませんでした。それは皆さんにとって余りに当然の関心であり、改めて言及する必要がないと考えたからです。実際、このことは皆さんが慣れ親しんできた大学という組織の基本であり、今更述べるまでもないことです。私がここで注意を喚起したいのは、大学が専門的・先端的知識の自由な探求そのものを尊ぶ、「珍しい」独特な社会組織であるということです。大学ではそうした探求の意味（「何のために」）をとにかくうるさく問い掛けるよりも、この探求そのものをプラスと評価し、それを互いに高め合う組織です。しかし、大学以外の組織においては知識の探求そのものには総じて関心がなく、個々の知識の意味やその効用に専ら関心が向けられることはむしろ自然です。

博士号を手にした人々が社会と接触し、知識基盤社会の貴重な人材になろうとする時、真っ先に出会うのは知識をめぐる組織感覚のズレです。従来と同様、大学に止

まるというのであればこの問題は発生しません。しかし、大学という組織は所詮社会の一組織に過ぎず、その範囲内で動き回っている限り、博士号取得者の活動の場の質的拡大はほとんど期待できません。私が社会との接点を念入りに模索し、必要に応じて積極的な選択をすべきだと言ったのは、大学と社会との感覚のズレを皆さんの側から乗り越えていただきたいと考えたからです。勿論、社会の側の状況が皆さんにとって全て満足すべきものであるとは思いませんし、幾多の条件整備が必要なことを知らないわけではありません。しかし、少なくとも日本の大学に関する限り、そう前途洋々とばかりとは言えない状況にあることは皆さんがよく承知していることです。従って、大学を起点にしつつも大学内に止まることなく、社会への貢献と自己実現を通して結果的に大学の影響力を社会に広げていく役割を果たしていただければ、これほど素晴らしいことはないとは私は考えます。

一昔前の日本では類い稀な安定が見られ、成り行きに任せにしている「どうにかなる」という気分が支配していました。この歴史上稀な体験が可能であった時代は過ぎ去りました。今や、老若男女を問わず、「どうにかしなければならぬ」という仕儀に立ち至りました。こうした中で皆さんには大きな可能性があると思っておりますが、もう一つ皆さんには貴重な財産があります。それは皆さんがこの数年にわたって東京大学で磨き、大切に育んできた内なる「象牙の塔」です。これは何が起っても皆さんから決してなくなることはない貴重な財産です。時にはこの財産に思いを致し、自らを励ましてください。この内なる「象牙の塔」を通して皆さんと東京大学とはいつまでも固く結合しており、東京大学は何時までも皆さんにとってエネルギーの源でありたいと念願しています。人間は自らの人生を完全にコントロールすることはできません。それだけに出会いは大切であり、意義深いものです。東京大学と皆さんとの出会いが有意義であったことを心から切望します。

最後に、皆さん一人一人が可能な限り多くの幸運に恵まれ、それぞれに悔いのない人生を送られるよう心から祈念して、私の告辞と致します。

平成十七（2005）年三月二十四日

東京大学総長
佐々木 毅

学位記授与式（修士課程）来賓挨拶

藤嶋 昭 特別荣誉教授

修士の学位をとられた皆様おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

修士課程の2年間、いかがでしたでしょうか。研究を進められる過程では、必ずしも順調に研究が進まず、時に悩み、またご自分の力不足などを感じられることもあったかも知れません。しかし、最終的には素晴らしい内容の修士論文として完成され、充実した思いで今日を迎えられたことでしょうか。心よりお祝い申し上げます。

皆様の中には博士課程に進まれ、今の研究を継続される方もおられるでしょうし、企業や官庁で新しい仕事に就かれる方もおられます。この2年間で学び、得たことをカテにこれからも心置きなくご活躍されることを祈念申し上げます。

さて、昨年私の年賀状には、江戸時代の終わりに活躍した儒学者佐藤一斉の言誌四録からとった言葉を使わせてもらいました。

「少にして学べば 壯にして為すことあり
壯に学べば 老いて衰えず
老にして学べば 死して朽ちず」

というものであります。いくつになっても学びましょう。これがすべての基本です、というものであります。いつの時も学ぶという姿勢を保つようにしたいものです。常に自分を高めようと努力することが大切ではないかと思えます。

さて、人は何のために研究したり仕事をするのでしょうか。私自身は大学にずっとおりましたので、何のために研究をするのかを常に自問することが多くありました。私自身はエネルギー問題や環境問題に関係する研究をしてきましたので、次のように考えておりました。全ての人が最終的に望むことは何か。健康で快適な雰囲気のもとで天寿を全うすることではないかと。私の場合には光触媒という分野がこの目的にかなうことになるのではないかと考えつつ、研究を続けてきました。ぜひ皆様に、時に、何のために仕事をするのか、研究の究極の目的は何かを考えていただければと思います。基礎的な分野に関わる方はなおさらのことです。新しい基本的な概念などを作ったり、あるいは提案していただくことができれば素晴らしいことです。すぐには人類のために役立つ



たないかもしれません。しかしいろいろな人が新しい文化を楽しんだり、将来さらにある分野が開かれるものとなる可能性が秘められています。

研究を行うにしろ、企業や官庁で仕事をするにしろ、自分1人だけではできません。必ず仕事はグループで、あるいは集団の中で行われます。この時の素晴らしい雰囲気こそが大切であると思います。

私、去年7月、パリでの太陽エネルギー関連の国際会議があり、招待講演をさせていただきました。金曜日のお昼に1週間の会議が終わり、午後自由時間ができましたので、オルセー美術館に行き、5階の印象派の絵を堪能しました。ルノアール、クロード・モネ、ゴッホやゴーギャンなど、それぞれに特徴のあるタッチや色使いに時が経つのを忘れるほどに、深く感動し見入りました。ただ見るだけで、これらの画家の詳しいことは存じませんが、しかしこれらの絵を見てきて、この4人の傑作がほとんど同じ時代に描かれていることに気がつきました。1870年代のものが多くありましたが、あとで調べてみますと、ルノアールとモネは同じアトリエで学んでいますし、ゴッホとゴーギャンは一時、同じ家に住んでいたことが分かりました。お互いに影響を受けながらも個々のオリジナリティを発揮し、名画が生み出されたのではないのでしょうか。

今年物理の年と言われています。アインシュタインが1905年にブラウン運動の式、光電効果の式、特殊相対性理論の式という重要な論文3報を発表して100年目に当たります。天才アインシュタインでも誰にも影響されずにこれらの研究ができたのでしょうか。1911年や1927年に撮られたベルギーブリュッセルで開催されたソルベー会議の写真をしてみると、アインシュタインを中心に、ボーア、プランク、シュレーディンガー、ブラック、キュリー夫人など現代物理学を作った人々がほとんど全員集まっています。量子力学系が完成するのにも、それぞれに有能な科学者達が互いに刺激を受け合いながら素晴らしい雰囲気のもとで、研究が進められてきたことが分かる写真です。

今年の私の年賀状に使わせて頂いたのは、正法眼蔵で知られる永平寺の開祖道元の言葉で、

「霧の中を歩めば、覚えざるに衣湿る」

というものです。

これは、「この程度の霧ならば濡れないだろうと蓑をつけずに歩いていると、いつの間にか衣服は水気を含んで、じっとりと湿ってしまう」、自分では湿ってきたという意識がないうちに、いつの間にか霧の影響を大きく受けている、という意味で、私達は知らず知らずのうちに周囲から色々と影響を受けていることの例えです。芸術にし

ろ科学研究や発明にしろ、決して1人だけの力では良い結果が生まれるものではない、ということが、この道元の言葉からお分かり頂けると思います。

皆様が仲間の方々とともに切磋琢磨して熱い雰囲気を作り出し、その中から素晴らしい研究や仕事を完成していかれることを願って止みません。

本日は誠におめでとうございました。



学位記授与式（博士課程）来賓挨拶

戸塚 洋二 特別荣誉教授

皆さん、博士号取得、まことにおめでとうでございます。さぞかしほっとなさっていることと思います。衷心よりお慶び申し上げます。

私が5年かかってようやく学位を取ったのは、もう30年以上前の1972年です。今だから言いますが、博士論文審査の前日、論文に準備不足の箇所が見つかり、後輩と一緒に一睡もしないで発表スライドの改良をしました。幸い審査員は私の不安な箇所気づかず、無事に審査をパスということになりました。師匠の小柴先生におめでとうの握手をして頂いたとき、そんな苦勞も忘れて喜んだことを思い出します。懐かしくもあり、苦勞の多いことでもありました。

先日、佐々木総長から堅い話は僕がやるから気楽な話をしてくれとご命令を受けました。私は、研究現場で若い者と一緒に還暦まで過ごし、高尚なことを考える暇も学ぶ暇もありませんでしたので、もともと堅い話をすることはできません。ということで、私のささやかな経験に基づいたお話を2つほどさせて頂きたいと思います。

1) 大学時代不勉強

私は学部時代空手部に所属していて、講義にでたことは数えるほどしかありませんでした。同学年のほとんどの皆さんは私が在籍していたことさえ知りませんでした。勉強不足で臨んだ大学院入学試験はむろんさんざんで、小柴先生にお情けで研究室にひろって頂きました。小柴先生はよく「俺は成績が悪かった」と言われますが、その先生にひろって頂いたものですから、今までずっと「おまえをビリでひろってやった」と言われ続けております。死ぬまで言われ続けることでしょう。

学部時代に不勉強だった当然の付けとして、基礎学力が徹底的に不足しました。基礎学力を定義するとすれば、当該分野及び隣接分野を広く概観できる力ということになりましょうか。実は今でも基礎学力不足を痛感しています。研究をやる上で、基礎学力が必要な理由を2つ上げますと、

- (ア) 興味ある研究結果が出たとき、それが持つインパクトを広く検討すべきであること、
- (イ) 一つの研究が終わって次の研究計画を立てるとき、広い分野のサーベイを行わないと、自分が現在やっている仕事の延長線上でしか次のテーマが思い浮かばないこと、です。



小柴先生が行ったカミオカンデ実験を例に取りましょう。当初の研究目的は、素粒子物理学に関係する「陽子崩壊の探索」でした。奥飛騨にある神岡鉱山の坑道奥深く、我々弟子どもは、朝7時から時には夜11時まで装置の点検や観測作業に没頭する日々を送りました。インターネットも普及していない時代ですから、データは現場で磁気テープに落とさなければなりません。どうしても毎日鉱山内に入る必要があったのです。観測が定常的になると、シフトで鉱山に入るのは1人だけです。作業灯の下で一人弁当を食べるわびしさは今思い出しても悲しくなります。苦労話はこのあたりにします。残念ながら、研究を始めて2年たっても陽子崩壊は起こらず、陽子崩壊を予言した理論が誤りであった、という結論になりました。否定的な結果ですが重要な成果ですので、カミオカンデの実験はこの成果を持って終わらせることもできました。しかし、カミオカンデ装置が予想外に高性能だったので、さらに継続できる研究テーマを探しました。

ニュートリノは太陽の中心で大量に作られ地球に届きます。アメリカのレイ・デービス氏は長年太陽ニュートリノを観測しておりましたが、彼の結果はかなり異常なものでした。太陽の熱発生はわかっていますので、その値を使ってニュートリノの発生率を計算し、地球にあるデービス氏の観測装置で期待されるニュートリノ信号の頻度を求めることができます。彼は、観測された信号の頻度は期待値の3分の1しかないと言うのです。そこで小柴先生は、カミオカンデというデービス氏とは全く違った技術で、太陽ニュートリノ観測にチャレンジしようとしたわけです。環境放射線に起因するノイズ信号を10万分の1以下に落とすという大変困難な作業でしたが、やり遂げることができました。太陽やニュートリノというのは、陽子崩壊とかなり近い隣接分野ですが、我々がそれらの知識を持っており、研究の現状をモニターしていたことが幸いしました。

私ほど不勉強な方はいらっしやらないと思いますが、基礎学力不足を実感している方は、暇をみて継続的にキャッチアップを図って頂きたいと思います。キャッチアップのベストな方法をお教えしましょう。とにかく、相手が偉かろうが何だろろうがかまわず聞き回ることです。私の経験では、人に聞くことは、基礎学力向上だけでなく、研究を効率よく行うために必須のことです。人に聞くことを恥ずかしいと感じないことは、確かに一つの才能です。しかし、この才能は鍛えることができます。

2) 研究上の戦略・戦術の問題

次のお話は、研究上の戦略・戦術に関することです。

皆さんは、これからチャレンジしようと思っっている研究分野の選択を既に終えていると思います。研究者は、各自経験に基づいた戦略と戦術に基づいて、それぞれの

分野で研究計画を立てたり、研究を実際に遂行しているようです。私が採用していたささやかな戦略・戦術をお話したいと思います。

(ア) 研究計画を立てるとき、選ぶべき研究テーマは当然未解決の問題でなければなりません。従って、得られる研究結果はあまり予想が付きませんから、研究テーマを選ぶのはリスクが伴います。最後にはえいやと決めるわけですが、多くの経験に基づいた勘が勝敗を分けることになります。体育系の言葉で言えば、「練習を徹底してやれば自然に体が動く」、ということでしょうか。カミオカンデの例はすでにご紹介しました。

(イ) 研究にはほとんどの場合国際的な競争相手がいますから、彼らが持っていないユニークな観測装置を自作することが、競争に勝つ確実な方法の一つです。つまり、他人に真似のできない技術を身につけておくことが大切です。体育会系の言葉ですと、「得意技を持つ」、です。

私にも2つほど得意技がありました。若い頃ドイツのDESYという研究所で仕事をしていたとき、長さが1メートル以上ある比例計数管を8000本以上作って動かしました。これらから得られたデータを使って新しい素粒子の共鳴状態を発見するのに貢献することができました。あと一つは、カミオカンデで大量に使われた光電子増倍管の取り扱いや高性能化に習熟していたことです。ドイツで参加した2番目の実験では、共同研究者と一緒に3000本の光電子増倍管を動かしました。これは、当時世界で最も多くの光電子増倍管を使った実験でした。ずっと後のスーパーカミオカンデの実験では11000本以上の光電子増倍管を使いましたが、おかげであまり苦勞しませんでした。

(ウ) 研究が進行して、おもしろい結果が出たとき、さらに努力して、結果を出し続けることが重要です。むろん、このためには幸運が必要ですが、ここが勘の見せ所です。これによって競争相手を寄せ付けず、悠々と独走することが可能です。体育会系の言葉では「相手がひるんだときにすかさず2の手、3の手を繰り出す」、ことが極意です。

ニュートリノの例を挙げましょう。カミオカンデは、大気中で高エネルギーの宇宙線が作る大気ニュートリノの観測も行いました。先ほど説明した太陽ニュートリノも同時に観測していたので大忙しでした。驚いたことに、大気ニュートリノの観測でも、予想外の観測結果が出ました。勘の大当たりです。しかし、太陽および大気ニュートリノの観測結果に世界は注目しましたが、完全に納得するまでには至らなかったもので、カミオカンデより10倍以上大きな

スーパーカミオカンデを建設しました。スーパーカミオカンデは50000トンという世界に類をみない大きな装置で、たちまち大気ニュートリノ振動を確認し、太陽ニュートリノ振動も他の実験と共同で確認することができました。さらに、ニュートリノは加速器で人工的に作れることに着目し、つくばにある高エネルギー加速器研究機構で作ったニュートリノを250km離れたスーパーカミオカンデで測定し、大気ニュートリノ振動を人工ニュートリノで確認する実験を始めました。この実験は今年無事修了し、確かにニュートリノ振動が起きていることを検証することができました。

このあたりでようやくヨーロッパとアメリカが追隨してきました。アメリカは今年、そしてヨーロッパは来年、大型加速器を使った類似の実験を開始します。

我が方はさらにもう一歩先にいかなければなりません。現在東海村に建設中の新型加速器を使い、2009年から新しいタイプのニュートリノ振動の研究を開始します。

以上のように、欧米に先んじた研究を継続できたことは大変痛快でした。2の手、3の手がうまく決まった手応えがありました。

というわけで、私の研究における戦略・戦術は、大学時代の空手で覚えた武道の方法を無意識に応用してきたこととなります。むろん、これは全く個人的な体験で、皆さんに直接お役に立つことではありません。自分に適した戦略・戦術を見つけると、研究の遂行や新たな研究の発展に大変役に立つことを、皆さんにお伝えしたかったのです。

3) 最後に

「研究者は2つの専門に通暁し、かつ広い視野をもて」、というような不可能に近い難しいことをおっしゃる企業の方がおります。確かにこれは望ましい研究者像です。しかし、一つの専門を究めることができれば、成功した同じ戦略・戦術を使って、別の専門にチャレンジすることも比較的容易なのではないか、とも思っています。残念ながら私の限られた能力では、一つの専門に専念することで人生をすり減らしてしまいました。皆さんも、まず、一芸に秀でることを目標とされたらいかがでしょうか。余力があれば、さらにいくつかの芸を究めることにチャレンジすればよいと思います。

とりとめのない話をいたしました。以上で私のお祝いの言葉に代えさせていただきます。本日はおめでとうございました。

セクシュアル・ハラスメントに係る懲戒処分の指針、制定される

このたび、「セクシュアル・ハラスメントに係る教職員懲戒処分の指針」が制定されました（3月15日（火）教育研究評議会、3月17日（木）役員会）。教職員の懲戒処分は就業規則を根拠として行われますが、いかなる行為についていかなる懲戒とするかの判断については、従来は主に人事院事務総長通知「懲戒処分の指針について」を参考にしていました。そこで、教職員が非公務員となったことを前提として、人事院事務総長通知に基本的には拠りつつ、本学としての指針を定める方向で、現在検討が進められています。ただ、セクシュアル・ハラスメントについては、懲戒へ進む手続が他の場合と異なることもあるため、このたび特に取り出して「指針」が定められたものです。

教職員の皆様におかれては、セクシュアル・ハラスメントとなるような言動をされないよう、改めてこの機会に自省自戒して下さいようお願い致します。
（渡辺 浩 元理事（副学長）・ハラスメント防止委員会委員長）

セクシュアル・ハラスメントに係る教職員懲戒処分の指針

役員会

平成17年3月17日

東京大学教職員就業規則第32条、第38条及び第39条に基づいてセクシュアル・ハラスメントに係る教職員の懲戒処分を行う場合には、原則として以下の指針によるものとする。ただし、当該教職員の職責・その職責と懲戒理由とされる行為との関係・当該教職員の過去における非違行為の有無等を総合的に考慮し、個々の事案の内容によっては、以下の指針と異なる処分量定とすることもあり得る。また、本指針は、懲戒処分の対象となり得るセクシュアル・ハラスメントを、以下に掲げた例に限定するものではない。

- 1 教育上の指導者と学生等の関係、若しくは職場における上司・部下等の関係に基づく影響力に乗じて、強いて性的関係を結び若しくはわいせつな行為をした教職員は、懲戒解雇、諭旨解雇又は停職とする。
- 2 暴行若しくは脅迫を用いてわいせつな行為をした教職員は、懲戒解雇、諭旨解雇又は停職とする。
- 3 相手の意に反することを認識し、若しくは認識すべき状況にありながら、わいせつな言辭、性的な内容の電話、性的な内容の手紙・電子メールの送付、身体的接触、つきまとい等の性的な言動（以下「わいせつな

言辞等の性的な言動」という。)を繰り返した教職員は、諭旨解雇、停職、出勤停止又は減給とする。

この場合において、相手が教育上の指導を受ける立場にある学生等若しくは職務上の部下等であるときは、諭旨解雇又は停職とする。

- 4 相手の意に反することを認識し、若しくは認識すべき状況にありながら、わいせつな言辞等の性的な言動を執拗に繰り返したことにより相手が強度の心的ストレスの重積による精神疾患に罹患したときは、懲戒解雇、諭旨解雇又は停職とする。
- 5 相手の意に反することを認識した上で、わいせつな言辞等の性的な言動を行った教職員は、出勤停止、減給又は戒告とする。

附 則

上記のセクシュアル・ハラスメントがなされてから10年以上経過した場合には、懲戒処分の対象としない。

部局長の交代

部局長の交代がありました。以下のとおり新部局長をご紹介します。

大学院医学系研究科・医学部

廣川 信隆 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月(再任))



昭和46年3月 医学部医学科卒業
昭和58年10月 教授(医学部解剖学)

[所属(専攻・講座・分野・部門等)]

分子細胞生物学専攻 細胞生物学・解剖学講座 細胞生物学分野

[専門分野]

分子細胞生物学、分子神経科学

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

細胞内の物質輸送、細胞の形作りおよび情報伝達の分子機構と細胞骨格

1. Hirokawa N. Cross-linker system between neurofilaments, microtubules, and membranous organelles in frog axons revealed by the quick-freeze, deep-etching method. *Journal of Cell Biology* 94(1): 129-142. 1982.
2. Hirokawa, N., K. K. Pfister, H. Yorifuji, M. C. Wagner, S. T. Brady, and G. S. Bloom. Submolecular domains of bovine brain kinesin identified by electron microscopy and monoclonal antibody decoration. *Cell* 56(5): 867-878. 1989.
3. Okada, Y., H. Yamazaki, Y. Sekine-Aizawa, and N. Hirokawa. The neuron-specific kinesin superfamily protein KIF1A is a unique monomeric motor for anterograde axonal transport of synaptic vesicle precursors. *Cell* 81(5): 769-780. 1995.
4. Hirokawa, N. Kinesin and dynein superfamily proteins and the mechanism of organelle transport. *Science* 279(5350): 519-526. 1998.
5. Hirokawa, H. and R. Takemura. Molecular motors and mechanisms of directional transport in neurons. *Nature Reviews Neuroscience* 6:201-214, 2005.

医学部付属病院

永井 良三 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月 (再任))



昭和49年9月 医学部医学科卒業

平成11年5月 大学院医学系研究科内科学専攻循環器内科教授

平成15年4月 医学部附属病院長

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

医学系研究科内科学専攻循環器内科

[専門分野] 循環器内科学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. Shindo T, Manabe I, Fukushima Y, Tobe K, Aizawa K, Miyamoto S, Kawai-Kowase K, Moriyama N, Imai Y, Kawakami H, Nishimatsu H, Ishikawa T, Suzuki T, Morita H, Maemura K, Sata M, Kagechika H, Kadowaki T, Kurabayashi M, Nagai R. Kruppel-like zinc-finger transcription factor KLF5/BTEB2 is a target for angiotensin II signaling and an essential regulator of cardiovascular remodeling. *Nature Med* 8:856-873, 2002.
2. Aizawa K, Suzuki T, Kada N, Ishihara A, Kawai-Kowase K, Matsumura T, Sasaki K, Munemasa Y, Manabe I, Kurabayashi M, Collins T, Nagai R. Regulation of platelet-derived growth factor-A chain by Kruppel-like factor 5: new pathway of cooperative activation with nuclear factor-kappaB. *J Biol Chem* 2004;279:70-76
3. Oishi Y, Manabe I, Tobe K, Tsushima K, Shindo T, Fujiu K, Nishimura G, Maemura K, Yamauchi T, Kubot N, Suzuki T, Kitamura T, Akira S, Kadowaki T, Nagai R. Kruppel-like transcription factor KLF5 is a key regulator of adipocyte differentiation. *Cell Metab* 2005; 1: 27-40.
4. Saiura A, Sata M, Hirata Y, Nagai R, Makuuchi M. Circulating smooth muscle progenitor cells contribute to atherosclerosis. *Nature Med* 2001; 7:382-383.
5. Sata M, Saiura A, Kunisato A, Tojo A, Okada S, Tokuhisa T, Hirai H, Makuuchi M, Hirata Y, Nagai R. Hematopoietic stem cells differentiate into vascular cells that participate in the pathogenesis of atherosclerosis. *Nature Med* 2002; 8: 403-409.

大学院人文社会系研究科・文学部

高橋 和久 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和48年3月 京都大学文学部卒業

昭和51年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了

平成6年12月 教授 (文学部)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]
欧米系文化研究専攻

[専門分野] 英語英米文学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

『エトリックの羊飼いの、或いは、羊飼いのレトリック』 (2004研究社)

『めぐりあう時間たち』 (翻訳、2003集英社)

『ラドヤード・キプリング』 (共編著、2003松柏社)

『イギリス文学』 (共編著、2003放送大学教育振興会)

大学院理学系研究科・理学部

岩澤 康裕 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和43年3月 理学部化学科卒業

昭和45年3月 大学院理学系研究科修士課程修了

昭和47年3月 大学院理学系研究科博士課程中退

昭和61年1月 理学部 (理学系研究科) 教授

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

化学専攻・物理化学講座・化学反応学研究室

[専門分野] 触媒化学、表面科学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. Y. Iwasawa: "Chemical Design Surfaces for Active Solid Catalysts", *Adv. Catal.*, 35, 187-264 (1987).
2. K. Asakura, K. K-Bando, Y. Iwasawa, H. Arakawa, and K. Isobe: "Metal-Assisted Hydroformylation on a SiO₂-Attached Rh Dimer. In Situ EXAFS and FT-IR Observations of the Dynamic Behaviors of the Dimer Site", *J. Am. Chem. Soc.*, 112, 9096-9104 (1990).
3. H. Onishi and Y. Iwasawa, "Reconstruction of TiO₂(110) Surface: STM Study with Atomic-Scale Resolution", *Surf. Sci. Lett.*, 313, L783-L789 (1994).
4. H. Onishi and Y. Iwasawa, "Dynamic Visualization of a Metal-Oxide-Surface/Gas-Phase Reaction: Time-Resolved Observation by Scanning Tunneling

Microscopy at 800K”, Phys. Rev. Lett., 76, 791-794 (1996).

5. A. Suzuki, Y. Inada, A. Yamaguchi, T. Chihara, M. Yuasa, M. Nomura, and Y. Iwasawa, “Time Scale and Elementary Steps of CO-Induced Disintegration of Surface Rhodium Clusters”, Angew. Chem. Int. Ed., 42, 4795-4799 (2003).
6. M. Tada, T. Taniike, L. M. Kantam, and Y. Iwasawa, “Chiral Self-Dimerization of Vanadium Complexes on a SiO₂ Surface: The First Heterogeneous Catalyst for Asymmetric 2-Naphthol Coupling”, Chem Commun., 2542-2543 (2004).

大学院農学生命科学研究科・農学部

會田 勝美 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月 (再任))



昭和43年 農学部水産学科卒業
昭和48年 大学院農学系研究科
水産学専門課程博士
課程修了
平成元年 農学部教授
[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]
水圏生命科学講座
[専門分野] 水族生理学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. 「魚類生理学の基礎」(編著 恒星社厚生閣、2002年)
2. 「動物生産学概論」(編著)
3. Eel Biology (編著 Springer、2003年)

大学院総合文化研究科・教養学部

木畑 洋一 教授

(任期：平成17年2月16日～平成19年2月15日)



昭和45年3月 教養学部卒業
昭和47年3月 大学院社会学研究科国際関係論
専門課程修士課程修了
平成4年4月 教養学部教授
[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]
国際社会科学専攻

[専門分野] 国際関係史、イギリス現代史

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

- 『支配の代償』(東京大学出版会)
『帝国のたそがれ』(東京大学出版会)
『第二次世界大戦』(吉川弘文館)

大学院数理科学研究科

桂 利行 教授

(任期：平成17年4月～平成18年3月)



昭和47年3月 理学部卒
昭和49年3月 大学院理学系研究科修士課程修了
昭和51年3月 大学院理学系研究科博士課程中退
平成4年4月 大学院数理科学研究科教授

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

数理科学専攻・数理代数学大講座

[専門分野] 代数幾何学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. On elliptic surfaces in characteristic p (with K.Ueno), Math. Ann., 272 (1985), 291-330.
2. Families of supersingular abelian surfaces (with F. Oort), Compositio Math., 62 (1987), 107-167.
3. Generalized Kummer surfaces and their unirationality in characteristic p , J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, Sect. IA, Math., 34 (1987), 1-41.
4. On a stratification of the moduli of K3 surfaces (with G. van der Geer), J. Eur. Math. Soc., 2 (2000), 259-290.
5. 代数幾何入門, 共立講座21世紀の数学、共立出版 1998.

大学院新領域創成科学研究科

磯部 雅彦 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和51年3月 工学部卒業
昭和52年3月 大学院工学系研究科修士課程修了
昭和56年9月 工学博士 (東京大学)
平成4年1月 教授 (工学部)
平成11年4月 教授 (大学院新領域創成科学研究科)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

環境学研究系社会文化環境学大講座

[専門分野] 海岸工学、沿岸環境

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. 海岸の環境創造、朝倉書店、(1994).
2. Equations for Numerical Modeling of Wave

- Transformation in Shallow Water, Developments in Offshore Engineering, Gulf Publ. (1998).
3. Framework of Coastal Environment Engineering, Keynote Lecture of 4th Int. Conf. on Hydrodynamics (2002).
 4. Environmental Problems in Tokyo Bay, Keynote Lecture of 26th Conf. on Ocean Eng., Taiwan, (2004).

医科学研究所

山本 雅 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月 (再任))



昭和47年3月 大阪大学理学部卒業

昭和52年3月 大阪大学大学院理学研究科修了

平成3年11月 教授 (医科学研究所)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]
癌・細胞増殖部門

[専門分野] 分子生物学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. Oligo-astheno-teratozoospermia in mice lacking Cnot7, a regulator of retinoid X receptor beta. Nature Genetics, 36: 528-533, 2004.
2. Negative regulation of BMP/Smad signaling by Tob in osteoblasts. Cell, 103: 1085-1097, 2000
3. Similarity of protein encoded by the human c-erbB-2 gene to epidermal growth factor. Nature 319:230-234, 1986

地震研究所

大久保 修平 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和51年3月 理学部卒業

昭和57年4月 理学博士 (東京大学)

平成9年4月 教授 (地震研究所)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]
地球計測部門

[専門分野] 地球力学・地球重力論

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

1. 「地殻ダイナミクスと地震発生」(共著、朝倉書店、2002)
2. 大久保修平, 地震および火山噴火によって生じる重力とポテンシャルの変化ーディスロケーション理論に基

づく定式化, 測地学会誌, 40, 1, 1-16, 1994.

3. Sasao, T., Okubo, S. and Saito, M., A Simple Theory of the Dynamical Effects of a Stratified Fluid Core upon Nutational Motion of the Earth, in "Nutation and the Earth's Rotation", eds. Fedorov, Smith and Bender, 165-183, 1980.

社会科学研究所

小森田 秋夫 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和45年3月 法学部卒業

昭和47年3月 大学院法学政治学研究科基礎法学専門課程修士課程修了

昭和51年3月 同博士課程修了

平成5年4月 教授 (社会科学研究所)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

比較現代法部門社会主義法分野

[専門分野] ロシア法・東欧法

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

「現代ロシア法」(編著)

「市場経済化の法社会学」(編著)

「世界の社会福祉 (2) ロシア・ポーランド」(共著)

「ソビエト裁判紀行」

「ロシアの陪審裁判」

生産技術研究所

前田 正史 教授

(任期：平成17年4月～平成18年3月)



昭和51年3月 工学部金属工学科卒業

昭和53年3月 大学院工学系研究科金属工学専攻修士課程修了

昭和56年3月 大学院工学系研究科金属工学専攻博士課程修了

平成8年11月 生産技術研究所 教授 (第4部)

[所属 (専攻・講座・分野・部門等)]

循環材料学、材料熱力学、素材プロセス工学、環境科学

[専門分野] 持続性循環資源工学

[研究内容 (代表的な著書や論文等)]

酸化物やハロゲン化物の高温融体の熱力学、溶融塩や溶融金属中のガスの溶解度や溶解速度の測定、チタンの新製造法の開発、電子ビーム溶解法やプラズマ溶解

法を用いた太陽電池用のシリコンの製造、貴金属やニッケルなどの有価金属の回収・分離・精製における新規プロセスの開発など、鉄鋼や非鉄金属材料だけでなく、溶融物、高温ガスに関するものを中心に、研究を行っている。

1. “Advanced Physical Chemistry for Process Metallurgy” Academic Press, San Diego, CA (1997).
2. K. Mita, S. Yamaguchi, and M. Maeda: “Vapor Pressure Measurement of Zn-Fe Intermetallic Compounds” Metall. Trans. B, 35B (2004), 487-492.
3. S. Ueda and M. Maeda: “Phase Equilibria of the Al₂O₃-CaF₂-FeO System” Metall. Trans. B, 35B (2004), 181-182.
4. Y. Kayanuma, T. H. Okabe, and M. Maeda: “Metal Vapor Treatment for Enhancing the Dissolution of Platinum Group Metals from Automotive Catalyst Scrap” Metall. Trans. B, 35B (2004), 817-824.
5. 野村浩康・前田正史 編「大学の社会的責任 大学における学問・教育・人材育成」（東京、丸善株式会社 2001年）

史料編纂所

保立 道久 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和48年3月 国際キリスト教
大学教養学部卒業

昭和50年3月 東京都立大学人
文学部研究科修了

平成7年4月 教授

[所属（専攻・講座・分野・部門等）]
古文書古記録部門

[専門分野] 平安鎌倉時代史

[研究内容（代表的な著書や論文等）]

『中世の愛と従属——絵巻の中の肉体』（平凡社、1986）

『平安王朝』（岩波新書、1996）

『物語の中世』（東京大学出版会、1998）

『黄金国家—東アジアと平安日本』（青木書店、2003）

『歴史学をみつめ直す—封建制概念の放棄』（校倉書房、2003）

分子細胞生物学研究所

宮島 篤 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月（再任）)



昭和50年3月 静岡大学理学部
化学科卒業

昭和52年3月 東京大学大学院理
学系研究科修士課
程修了

昭和55年3月 大学院理学系研究
科博士課程修了

平成6年10月 分子細胞生物学
研究所教授

[所属（専攻・講座・分野・部門等）]

分子機能・形成大部門、機能形成研究分野

[専門分野] 分子生物学

[研究内容（代表的な著書や論文等）]

1. Cloning of an interleukin-3 receptor gene: a member of a distinct receptor gene family. Science 247, 324-327. 1990.
2. Expression cloning of the human IL-3 receptor cDNA reveals a shared β subunit for the human IL-3 and GM-CSF receptors. Cell 66, 1165-1174, 1991.
3. Cytokine receptors and signal transduction. Ann. Rev. Immunol. 10, 295-331, 1992.
4. In vitro expansion of murine hematopoietic progenitors derived from the embryonic aorta gonad mesonephros region. Immunity 8, 105-114, 1998.
5. Hepatic differentiation induced by oncostatin M attenuates fetal liver hematopoiesis. Proc. Natl. Acad. Sci. USA. 96: 7265-7270, 1999.
6. Fetal liver development requires a paracrine action of oncostatin M through gp130. EMBO J 18, 2127-2136, 1999.

海洋研究所

寺崎 誠 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月)



昭和48年3月 農学系研究科博
士課程修了

平成6年12月 教授（海洋研究
所）

[所属（専攻・講座・分野・部門等）]
国際沿岸海洋研究センター沿岸
生態分野

[専門分野] 生物海洋学

[研究内容（代表的な著書や論文等）]

「Biology of Chaetognatha」(Oxford Univ. Press)

「Large Marine Ecosystem of the Pacific Rim」

(Blackwell Sci.)
 「海洋の大事典」(東京堂)
 「日本全国沿岸海洋誌」(東海大学出版会)

総合研究博物館

高橋 進 教授

(任期：平成17年4月～平成19年3月 (再任))



昭和47年3月 法学部卒業
 昭和61年3月 法学部教授
 平成3年4月 大学院法学政治学
 研究科教授
 平成13年4月 総合研究博物館
 長

[所属(専攻・講座・分野・部門等)]
 法学政治学研究科政治外交史講
 座

[専門分野] 国際政治史、ヨーロッパ国際政治

[研究内容(代表的な著書や論文等)]

- 『ドイツ賠償問題の史的展開』(岩波書店、1984年)
- 『解体する現代権力政治』(朝日新聞社、1994年)
- 『冷戦と経済繁栄(世界の歴史第29巻)』(共著：中央公論社、1999年)
- 『歴史としてのドイツ統一』(岩波書店、1999年)
- 『ヨーロッパ新潮流』(御茶ノ水書房、2000年)
- 翻訳 K.D.ブラッハー『ドイツの独裁Ⅰ・Ⅱ』(共訳、岩波書店、1975年)

部局長退任の挨拶

退任にあたって

前大学院人文社会系研究科長・文学部長

稲上 毅

この2年間いつも意識させられたのが部局長というもの
 のの地位と役割についてであった。ふたつのビジネス・
 モデルが念頭にあった。支店長モデルと単科大学長モ
 デルである。ある時期まで、東京大学の部局長はいわば
 取締役のような存在であった。しかし法人化して格下げさ
 れ、取締役でない支店長になった。国立大学法人法ある
 いは労働法制からすれば、これが基本的な理解である。
 けれども、その支店長は大きな力をもたなければなら
 ない。そうしないと、総長は有効なリーダーシップを
 発揮することができない。トップダウンしても、支店長に
 力がなければ、その中身が現場に浸透しないからである。

もちろん、トップダウンといっても、その内容が教育
 と研究の現場から大きく乖離したのでは意味がない。特
 に、教育と研究においてそうである。この理解に立てば、
 東京大学のような大きな総合大学の場合、部局の個性と
 自発性、そして全体としての多様性を大切にしていくな
 る必要がある。部局長の単科大学長モデルはこの点に深
 い係わりがある。

いずれにしても、法人化後の部局長はいかなる存在で
 あるべきか、まだ十分に学内合意されていないひとつの
 基本問題であるように私には思われる。

退任にあたって

前大学院理学系研究科長・理学部長

岡村 定純

国立大学としての最後の1年と国立大学法人としての
 最初の1年に部局長を務めるというまことに希有な経験
 をしました。法人化後1年たった現段階では、法人化に
 よって消滅した制約はほとんど見えず、新たな制約ば
 かりが目立つ状況です。さらに、最近の授業料値上げの
 報道にも見られるように、大学はどんな状況におかれて
 いるのか、そもそも大学の使命は何かすら、マスコミを
 含め世の中にほとんど理解されていません。

このような社会状況の中では、自分の組織を守るとい
 う組織防衛論では展望は開けません。人類の将来を担
 う人材を養成する教育の意義、学問の価値、大学の使命
 などを広く社会に訴えて、大学を守ろうという大きな
 流れを作る必要があると感じました。

激動の二年間が無我夢中のうちに過ぎたというのが実感です。皆様のご支援に感謝いたします。

研究科長・学部長の退任にあたって

前大学院総合文化研究科長・教養学部長
浅島 誠

この2月15日をもって2年の任期を全うして総合文化研究科長職を無事に退任できましたことは、研究科内の教職員の方々や、総長はじめ総長室、科所長や事務の皆様方のご支援と御指導の賜と思っています。この場をかりて、関係の皆様方に厚く御礼を申し上げます。在任中の二年間の前半は、法人化という大波への対応と準備で様々な葛藤がありました。法人化の抱える問題はあまりにも多く、何の準備や法整備もない中で法人化を行うことへの問題点が、私達の教授会では当時真剣に議論されました。教授会でも、法人化後の会計の在り方、事業所の在り方、ハラスメント防止など、様々な専門の方々をお招きして対応方法を検討するなどしました。任期の後半は、2004年4月から実現した法人化への対応を行いました。この件については、教養学部等の事務部の方々に本当にお世話様になりました。法人化して1年近くを経て、東京大学も大きく様変わりしつつあることを実感しています。ただ、東京大学においては科所長会議などの意見集約のための機関が機能していることによって、大学のあるべき姿にいつも意見を述べる事ができたのではないかと私は思っています。

東京大学は世界の大学としての方向性を明確に打ち出しているのです、その基盤を充分に確固たるものとして欲しいと考えます。しっかりした基礎学問と応用学問をバランス良く運営すること、学部学生や大学院学生そして教員に充実した教育と研究環境が与えられること、東京大学が世界の大学として持続的に発展するシステムとデザインの将来像を構成員にもきちんと知らせることが必要になってきていると思っています。

退任にあたって

前大学院数理科学研究科長
薩摩 順吉

東京大学には約20年お世話になりました。工学部物理工学科で7年近く、その後大学院数理科学研究科で13年を過ごしました。本郷と駒場両方の文化に触れることができたわけです。ともに楽しく充実した毎日を過ごさせて頂きました。他大学から来た人間として感銘深い点は、教職員の皆様が責任感と義務感に満ちあふれておられることです。3年間研究科長を勤め、法人化の真っ直中で仕事をしましたが、自身で新しいものを作り上げようとされる皆様の姿勢には感動的と言っていい位の印象をもちました。今後大学を取り巻く情勢はますます厳しくなると思われませんが、東京大学についてはいっさい心配しなくてよいと考えています。今後、全国のみならず全世界の大学の範として、積極的な教育研究活動を推進し続けられることを期待して、退任の挨拶と致します。どうも有り難うございました。

退任にあたって

前大学院新領域創成科学研究科長
河野 通方

工学部研究組織委員長に1996年に就任し、柏キャンパスに設置する新研究科の在り方を本格的に検討しはじめ以来、基盤科学研究科（後に系）のプロデューサー、新領域創成科学研究科基盤科学研究系系長、評議員を経て2期4年間の研究科長を務めさせて頂きました。教員200名弱の新組織を立ち上げる過程を執行部として、つぶさに体験できましたことは誠に興味深くかつ幸運であったと感じています。研究科長職に在り多種、多様な問題に遭遇し対処して参りましたが、価値のある素晴らしい研究科を作ろうとの意欲に燃えた非常に有能な多くの教員や、員数が少ないために常にオーバーワークになりがちな仕事を物ともしない力強い職員の皆さんに助けられて何とか大任を果たすことができました。本研究科はこの3月末で博士課程の2期生を送り出すことができ、ようやく一人前の感があります。しかし、環境学研究系の教員、学生は平成17年度末以降に本郷から移転すること、福利交流施設は未完成であることなど残心のある退任ではあります。どうか、皆様方には「柏は終わっていない。」ことへの御理解を頂ければ幸甚に存じます。

退任にあたって

前地震研究所長
山下 輝夫

法人化という大変革を経験し、2期4年つとめた所長職もようやく終わろうとしています。地震研究所は地震や火山噴火に関する基礎研究の推進について全国連携の中核的役割を果たしていますが、それには全国規模での協力と継続的な研究推進が欠かせません。しかし、今回の法人化は、このような研究の推進にとり、多くの問題をはらんでいると言わざるをえません。この4年間、共通の問題意識を持つ全国の研究所長の間でネットワークを構築し、また、学内の部局長とも協力して、さまざまな活動を行って来ましたが、先は不透明です。ただ、第1期中期目標期間中には、多くの問題点が、洗い出されることになると思いますが、その際、このようなネットワークが必ず有効に働くものと期待しています。

関係の皆様のご尽力により、地震研究所にとって長年の懸案であった新館の建設が始まりました。また、17年度には新たに、国際地震・火山研究推進室を設置し、国際的拠点としての役割を強化する方針です。私自身は、研究者に戻りますが、地震研究所の活動に今後とも皆様のご支援を期待しています。

退任にあたって

前社会科学研究所長
仁田 道夫

運悪く所長に再選され、合計4年も管理職を務めた。さらに運悪く、これが法人化移行期の只中であり、視界不良の乱気流の中を計器故障のまま曲芸飛行することになってしまった。運悪くの三乗は、巡り合わせと若干の人為により、全国研究所長会議会長を一年務めることになり、学術分科会附置研特別委員会の委員として半年に十数回の会合に皆勤する羽目になったことである。この過程で、いくつかのことを学んだ。たとえば、ホワイトカラーの生産性の最大の阻害要因は、経営戦略の誤りにあるという真理を体得した。いまさらだが、立場がかわると、物事が全く違って見えることを思い知った。苦しいことが多く、楽しいことの少ない4年間であったが、その中で、普段お付き合いの少ない理系の先生方と仕事をともにする機会をもったことは、貴重な経験だった。先生方が折々に吐かれた名言をかみしめながら、専門職への復帰の道を歩んでいきたい。

退任にあたって

前生産技術研究所長
西尾 茂文

平成14年4月より3年の間、生産技術研究所の所長を務めてまいりましたが、平成17年4月より本学の理事・副学長（財務担当）を務めることとなり、3月に所長を退任いたしました。東京大学の三極構造構想に示されているように、駒場キャンパスは「開かれたキャンパス」を目指しております。この三極構造構想の一翼を担うべく、「基礎研究に留まることなく実技術への結実を図る」という生産技術研究所のモットーに沿って、研究者の研究時間の確保、基礎研究の充実とグループ研究の育成、各種研究段階に即した所内外・学内外・国内外との連携強化、アカウントビリティーの確保、外部資金の獲得支援などに努めてまいりました。この間、学内外の多くの方々に力強いご支援を賜りました。この場をお借りして感謝申し上げますとともに、4月からは学術活動の自律・多様性と統合・総合性との両立を目指して理事の一員として小宮山総長をサポートしてゆきたいと存じますので、宜しく願い申し上げます。

退任にあたって

前史料編纂所長
石上 英一

私は、1999・2000年度と2003・2004年度の2回の所長を務めた。また、2000年度～2004年度まで中核的研究拠点（COE）形成プログラム「前近代日本の史料遺産プロジェクト」（Japan Memory Project: JMP）の研究リーダーも努めた。COEは21世紀COEの開始により途中から特別推進研究（COE）に変わったのが残念であった。JMPは史料編纂所に前近代日本史料の歴史情報研究拠点設置することを目的とし、大規模歴史情報DBシステム開発や日本前近代史料国際的利用環境構築の研究を進めた。JMPブランドは、欧米の日本前近代史研究の間で一定度の認知を得たと思う。第2回東アジア史料編纂研究編纂機関国際学術会議を2004年12月に開催し、中国・韓国の研究機関との学術交流も新しい展望が開けてきた。1999年からの6年間は、法人化の過程を経験した2度の所長職とCOEで、あっという間に過ぎた。この3月でJMPも所長も終り。4月からは、本業の日本古代史とまた青い海に魅せられてた専門外の分野ながらの奄美史とに、体勢を立て直して再挑戦したい。

前海洋研究所所長
小池 勲夫

法人化の1年目にたまたま全国の国立大学附置研究所が会員となっている国立大学附置研究所・センター長会議の会長役がまわってきて、多くの大学の研究所・センター長の先生方と学術研究に関して話し合う場があった。学術研究は大学が行っているボトムアップでの研究であると言うのがこれまでの分かりやすい説明であった。しかし、法人化によって外部資金の導入が積極的に奨励され、その多くが、国の施策や、産業界の要望に沿った研究資金となってくると各研究所のミッションによって外部資金の獲得に格段の差が出てくることになる。結果的には学術研究の観点から作られた研究所の目的の変更も迫られる場合も出てくる。私たちの海洋研究所は海洋の基礎科学を行うことで設立されているが、海洋には生物資源、地下資源を初めとする多くの応用分野があり、これらは外部資金の獲得のチャンスも高い。このバランスをどのように取るか、各研究者個人の判断と共に、組織としての研究所の判断の間われる問題である。

本郷三丁目交差点に東大病院への案内看板が設置される

3月30日（水）、本郷三丁目交差点に建つ日本信販「第三ビルディング」に、医学部附属病院への案内板が設置されました。この看板は、本学が日本信販株式会社に場所を提供していただいて設置したもので、同社には、同日医学部附属病院長からの感謝状を贈りました。

看板は、本学のロゴマークを入れ、病院と赤門への道順がわかるよう2箇所を設置しております。本郷三丁目交差点付近をご通行の方に、ご活用いただければ幸いです。



左から、神山晴美営業企画部長（日本信販株式会社 上席執行役員）、池上理事、石田秀雄業務部長（日本信販株式会社 上席執行役員）、弦本企画調整役



ニコス第三ビルディングの案内看板前にて（看板設置の企画等を担当した本学職員）

学生部

第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成17年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）合格者332人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）12人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）21人の受験番号が、3月23日（水）12時30分に、本郷構内で掲示により発表された。また、併せて、合格者の科類別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。

合格者は、3月24日（木）から27日（日）までの間、郵送により入学手続きを行い、3月29日（火）の健康診断及び4月1日（金）からの諸手続を済ませ、4月12日（火）の日本武道館での入学式に臨むことになる。

第2次学力試験（前期日程・後期日程）及び外国学校卒業学生特別選考の志願者数・合格者数等は、次のとおりである。

平成17年度第2次学力試験（前期日程・後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数
文科一類	415	2,243	1,330	1,297	416
文科二類	365	1,754	1,178	1,155	367
文科三類	485	2,374	1,572	1,541	489
理科一類	1,147	4,882	3,183	3,129	1,171
理科二類	551	2,446	2,019	1,947	569
理科三類	90	575	373	353	90
合 計	3,053	14,274	9,655	9,422	3,102

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成17年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	373	1,458	1,119	1,099	373	439.6375	332.9375	358.9717
文科二類	327	1,094	984	978	329	405.8125	322.2750	345.4079
文科三類	432	1,451	1,299	1,287	435	399.7750	316.8250	337.7357
理科一類	1,025	2,884	2,573	2,566	1,046	462.8375	310.7750	340.9695
理科二類	492	1,843	1,722	1,692	507	416.3875	310.5625	337.5048
理科三類	80	426	321	310	80	484.1500	381.7875	412.9902
合 計	2,729	9,156	8,018	7,932	2,770			

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成17年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜 合格者数	受験者数	合格者数	合格者科類別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	42	785	211	198	43	282	240	255.79
文科二類	38	660	194	177	38	311	265	275.68
文科三類	53	923	273	254	54	329	245	262.30
理科一類	122	1,998	610	563	125	418	328	346.58
理科二類	59	603	297	255	62	252	215	230.92
理科三類	10	149	52	43	10	293	240	270.30
合 計	324	5,118	1,637	1,490	332			

（注）外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成17年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分	志願者数	第1次選考 合格者数	第2次選考 受験者数	第2次選考 合格者数
	種別				
文科一類	第1種	14	3	2	1
	第2種	25	11	9	5
文科二類	第1種	40	10	9	3
	第2種	17	7	7	4
文科三類	第1種	9	2	2	0
	第2種	30	17	15	4
理科一類	第1種	42	11	10	5
	第2種	20	14	11	5
理科二類	第1種	7	3	3	3
	第2種	15	10	9	3
理科三類	第1種	1	0	0	0
	第2種	10	1	1	0
合 計	第1種	113	29	26	12
	第2種	117	60	52	21

なお、過去3年間の志願者数及び合格者数、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者及び比率は次のとおりである。

入学志願者数及び合格者数の推移

年度等 科類	平成17年度						平成16年度						平成15年度					
	志願者			合格者			志願者			合格者			志願者			合格者		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	1,458	785	2,243	373	43	416	1,235	1,079	2,314	373	43	416	1,701	1,130	2,831	545	63	608
文科二類	1,094	660	1,754	329	38	367	1,094	536	1,630	329	38	367	1,069	663	1,732	329	38	367
文科三類	1,451	923	2,374	435	54	489	1,708	1,107	2,815	435	53	488	1,487	957	2,444	433	53	486
理科一類	2,884	1,998	4,882	1,046	125	1,171	2,718	1,968	4,686	1,039	124	1,163	2,883	2,124	5,007	1,035	124	1,159
理科二類	1,843	603	2,446	507	62	569	1,941	610	2,551	502	62	564	1,899	661	2,560	499	61	560
理科三類	426	149	575	80	10	90	480	155	635	80	10	90	362	184	546	80	10	90
合 計	9,156	5,118	14,274	2,770	332	3,102	9,176	5,455	14,631	2,758	330	3,088	9,401	5,719	15,120	2,921	349	3,270

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平 成 17 年 度			平 成 16 年 度			平 成 15 年 度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	67.0%	58.1%	66.1%	75.9%	67.4%	75.0%	67.5%	54.0%	66.1%
	1 浪	30.3	25.6	29.8	22.5	20.9	22.4	29.7	30.2	29.8
	2 浪	1.6	7.0	2.2	1.1	7.0	1.7	1.5	3.2	1.6
	3浪以上等	1.1	9.3	1.9	0.6	4.7	1.0	1.3	12.7	2.5
文科二類	現 役	64.4	65.8	64.6	62.9	63.2	62.9	59.0	65.8	59.7
	1 浪	30.7	28.9	30.5	33.7	23.7	32.7	36.2	31.6	35.7
	2 浪	4.3	2.6	4.1	1.8	5.3	2.2	3.0	2.6	3.0
	3浪以上等	0.6	2.7	0.8	1.5	7.9	2.2	1.8	0.0	1.6
文科三類	現 役	63.4	50.0	62.0	69.7	56.6	68.2	64.4	64.2	64.4
	1 浪	31.0	33.3	31.3	25.5	20.8	25.0	31.4	20.8	30.2
	2 浪	3.0	3.7	3.1	3.7	5.7	3.9	2.3	5.7	2.7
	3浪以上等	2.5	13.0	3.6	1.1	17.0	2.9	1.8	9.4	2.7
理科一類	現 役	69.5	69.0	69.5	69.1	62.1	68.4	69.2	66.9	68.9
	1 浪	26.6	26.4	26.6	28.2	30.6	28.5	28.5	27.4	28.4
	2 浪	2.7	2.4	2.6	1.7	4.0	2.0	1.6	4.0	1.9
	3浪以上等	1.2	2.2	1.3	1.0	3.2	1.2	0.7	1.6	0.8
理科二類	現 役	61.7	54.0	61.0	60.4	72.6	61.7	63.5	57.4	62.9
	1 浪	32.5	38.7	33.2	33.9	16.1	31.9	29.7	29.5	29.6
	2 浪	3.6	1.6	3.3	3.6	9.7	4.3	5.0	3.3	4.8
	3浪以上等	2.2	5.7	2.5	2.2	1.6	2.1	1.8	9.8	2.7
理科三類	現 役	65.0	60.0	64.4	63.8	40.0	61.1	56.3	50.0	55.6
	1 浪	17.5	20.0	17.8	30.0	30.0	30.0	26.3	30.0	26.7
	2 浪	6.3	20.0	5.6	6.3	0.0	5.6	7.5	10.0	7.8
	3浪以上等	11.3	0.0	12.2	0.0	30.0	3.3	10.0	10.0	10.0
合 計	現 役	66.1	61.4	65.6	67.6	63.3	67.2	65.7	61.9	65.3
	1 浪	29.1	29.8	29.2	28.8	24.2	28.3	30.2	27.8	29.9
	2 浪	3.0	3.0	3.0	2.4	5.8	2.8	2.6	4.0	2.8
	3浪以上等	1.8	5.8	2.2	1.1	6.7	1.8	1.5	6.3	2.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

出身校所在地別合格者数及び比率

	平 成 17 年 度						平 成 16 年 度						平 成 15 年 度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率
東 京	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
	932	33.6	125	37.7	1,057	34.1	891	32.3	128	38.8	1,019	33.0	951	32.6	135	38.7	1,086	33.2
北 海 道	42	1.5	3	0.9	45	1.5	36	1.3	8	2.4	44	1.4	48	1.6	4	1.1	52	1.6
東 北	86	3.1	11	3.3	97	3.1	101	3.7	7	2.1	108	3.5	82	2.8	4	1.1	86	2.6
関 東 東京を除く	507	18.3	72	21.7	579	18.7	468	17.0	52	15.8	520	16.8	522	17.9	87	24.9	609	18.6
北 陸	96	3.5	12	3.6	108	3.5	94	3.4	14	4.2	108	3.5	111	3.8	11	3.2	122	3.7
中 部	258	9.3	26	7.8	284	9.2	275	10.0	31	9.4	306	9.9	288	9.9	23	6.6	311	9.5
近 畿	354	12.8	37	11.1	391	12.6	390	14.1	36	10.9	426	13.8	400	13.7	35	10.0	435	13.3
中 国	131	4.7	13	4.0	144	4.6	132	4.8	18	5.5	150	4.9	147	5.0	15	4.3	162	5.0
四 国	84	3.0	7	2.1	91	2.9	79	2.9	12	3.6	91	2.9	96	3.3	10	2.9	106	3.2
九 州 沖縄を含む	262	9.5	24	7.2	286	9.2	284	10.3	18	5.5	302	9.8	268	9.2	22	6.3	290	8.9
検 定 そ の 他	18	0.7	2	0.6	20	0.6	8	0.3	6	1.8	14	0.5	8	0.3	3	0.9	11	0.3
合 計	2,770	100.0	332	100.0	3,102	100.0	2,758	100.0	330	100.0	3,088	100.0	2,921	100.0	349	100.0	3,270	100.0

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

学生部

平成16年度における各運動部成績

平成16年度における（財）東京大学運動会各運動部の成績は以下のとおりです。

1. 全国大会等成績

・競技ダンス部

- 東京六大学競技ダンス選手権大会 優勝
- 国公立大学競技ダンス選手権大会 第2位
- 東部日本学生競技ダンスモダン新人戦 優勝

・少林寺拳法部

- 関東学生大会 総合優勝
- 全日本学生大会 優勝1部門

・漕艇部

- 全日本選手権大会 舵手付きペア準優勝
- 東日本大学選手権大会 舵手付きペア優勝
エイト準優勝

・女子端艇部

- 東日本新人戦 女子クオドルブル準優勝

・軟式野球部

- 東京六大学対抗秋季リーグ戦 優勝

・ボウリング部

- 関東学生選手権大会 準優勝
- 東日本学生選手権大会 第3位

・ボディビルアンドウエイトリフティング部

- 全日本学生パワーリフティング選手権大会
75kg級 準優勝 武太地（工3年）
100kg超級 準優勝 木内満（工4年）
- 関東学生ボディビル選手権大会
団体優勝
個人総合3位 ヨレス・ダヴィド（文Ⅲ1年）

・洋弓部

- 国公立大学王座決定戦 優勝

・ヨット部

- J24ダブルハンドレース 優勝

・ラクロス部

- 関東学生リーグ1部 3位

・レスリング部

- 東日本春季新人戦 66kg級 3位 上月直之（理Ⅰ1年）

2. 全国7大学総合体育大会（7大戦。旧帝国大学対抗戦）・東京地区国公立大学体育大会（国公立戦）および定期戦成績その他

・7大戦優勝

- 硬式野球部、女子柔道部、馬術部、洋弓部、女子ラクロス部

・国公立戦優勝

- 空手部、弓術部（個人）、女子弓術部、柔道部、準硬式野球部、卓球部、

・定期戦勝利

- 剣道部（対防衛大学校）、女子剣道部（対京都大学）、相撲部（対京都大学）、漕艇部（対一橋大学（東商戦）。エイト・シングルスカル）

・その他

- 自転車部（競技班）：丹沢秀樹（創成修士1年）
パラリンピック・アテネ大会で2部門入賞
 - 硬式野球部：松家卓弘（経4年）
横浜ベイスターズよりドラフト指名
 - 陸上運動部：松本翔（文Ⅰ1年）
箱根駅伝にて関東学連選抜チームとして出走
- ※記載中の各個人の学年は入賞当時の学年で記載

平成16年度は、漕艇部が全日本選手権大会で準優勝（漕艇部は平成16年度第2回総長賞も受賞）、軟式野球部が東京六大学対抗リーグ戦で初優勝、ボディビルアンドウエイトリフティング部は全日本学生選手権にて個人部門で優秀な成績を収めるなど、殊勲の勝利が続きました。また競技ダンス部や少林寺拳法部などは他大学運動部と比べても強豪として名を馳せ、それぞれ大学対抗戦にて連覇を続けています。

さらに硬式野球部より史上5人目の本学出身プロ野球選手が誕生、21年ぶりの本学所属選手の箱根駅伝での快走そしてパラリンピックにおける自転車競技での活躍など、東大スポーツの活躍の幅が格段に広がった年度でもありました。

本年度も更なる躍進を遂げようと、各運動部は日夜練習に励んでおります。本年度も各運動部への応援をよろしくお願いいたします。

詳しくは、（財）東京大学運動会のホームページ（<http://www.undou-kai.com/index.html>）をご覧ください。

医学部附属病院

個人情報保護法対応説明会を開催

医学部附属病院では4月1日（金）より「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」が施行されることに先立ち、3月14日（月）・18日（金）の両日、入院棟A15階大会議室において、教職員にその概略及び病院としての対応の基本方針を理解することを目的として、説明会が開催された。当日は130名を超える教職員が参加

し、個人情報保護法に対する関心の高さがうかがえた。

山本隆一助教授（情報学環）より「個人情報保護法と医療現場での対応－基本的考え方－」に関して講演が行われ、引き続き、大江和彦副院長より「日常診療における個人情報保護」について説明が行われた。

その後の質疑応答では、会場参加者により活発な意見交換が行われ、盛会裏に説明会を終了した。

また、院内ホームページに当日の資料を掲載して、院内へ広く個人情報保護の周知徹底を図った。



山本隆一助教授の講演



大江和彦副院長による説明

大学院総合文化研究科・教養学部

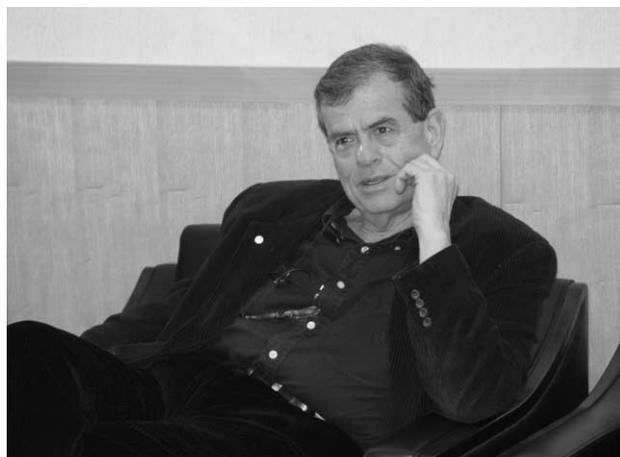
2004年度ノーベル化学賞受賞者講演会の報告

2月8日（火）11時から、駒場Iキャンパス数理科学研究科大講義室で、2004年度ノーベル化学賞を受賞されたイスラエル・テクニオン工科大学のアーロン・チカノバー（Aaron Ciechanover）教授による「The Ubiquitin Proteolytic System」と題された講演会（教養教育開発機構準備室、21世紀COE融合科学創成ステーション協賛）が行われました。浅島総合文化研究科長の挨拶の後、すぐ講演に入り、一時間を使った熱のこもった講演に、聴衆全員、魅了されました。



講演会の様子

講演の内容は、教養学部理科二・三類学生必修の「生命科学基礎」の内容にも関係するだけに、冬学期試験期間であるにもかかわらず、150人近くの学生が参加して熱心に教授の話に聞き入っていました。最後にチカノバー教授は、ノーベル賞授賞式の逸話などをスライドとともにお話され、和やかな雰囲気と大きな拍手とともに、講演会は無事終了しました。



アーロン・チカノバー教授

研究協力部

平成17年度東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）給付申請者の募集について

募集

下記のとおり募集しますので、所属研究科等事務部を通じ、研究協力部国際課まで提出願います。

なお、申請手続き等詳細につきましては、所属研究科等事務部担当係へお問い合わせください。

各事業の申請書類は下記のURLにてダウンロードできます。

http://www.u-tokyo.ac.jp/res02/d03_05_01_j.html

平成17年度東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）募集要項

1. 趣旨

大学院学生の国外における学会・研究集会での研究発表及びフィールドワーク（留学の場合を除く）に対し、学術奨励費を支給することにより、大学院学生の研究活動の活性化を図る。

2. 応募資格

大学院に在籍する学生（ただし、先方から旅費支給のある場合は、申請を認めない）。

3. 給付する学術奨励費

①平成17年6月から平成17年11月、及び、②平成17年12月から平成18年5月までに行われる国外における学会・研究集会での研究発表及びフィールドワークに対して、渡航する地域により、別表の額の学術奨励費を給付する。なお、学術奨励費には、渡航費の一部（地域により定額）及び学会参加登録料などの一部として5万円が含まれる（ただし、20万円を上限とする）。

4. 給付予定者数

各研究科等（学際情報学府及び公共政策学教育部を含む）若干名とする。

5. 申請手続

学術奨励費の給付を希望する者は、下記の書類を所属研究科等の長を通じて、東京大学学術研究奨励資金実施委員会委員長に提出する。

(1) 提出書類

ア 申請書（様式1） 2部（原本1部及び写1部）
イ 説明書（様式2） 2部（原本1部及び写1部）
なお、当該学会・調査等の概要を記載した要項等がある場合は、添付すること。

(2) 提出期限

給付区分	渡航期間 (出発月)	提出期限
前期 ①	平成17年6月～ 平成17年11月	平成17年4月8日（金）～ 平成17年4月20日（水）
後期 ②	平成17年12月～ 平成18年5月	平成17年9月15日（木）～ 平成17年9月30日（金）

なお、①の渡航期間において給付が決定した者は、②の渡航期間について申請することができない。

(3) 提出先

所属研究科等事務部

6. 選考及び結果の通知

給付対象者の選考は、所属研究科等の意見を尊重して、東京大学学術研究奨励資金実施委員会において書類審査のうえ、委員長が決定する。選考の結果は、所属研究科等の長を通じて、①については、5月下旬に、②については11月下旬に、申請者あて通知する。

7. 計画の変更・中止

申請した研究発表・フィールドワークを変更又は取り止める場合は、選考中あるいは給付決定後を問わず、速やかに所属研究科等の長を通じて委員長に報告し、その指示を受けること。

8. 報告書の提出

学術奨励費の給付を受けた者は、帰国後、速やかに所属研究科等の長を通じて、委員長に報告書を提出すること。

9. 問い合わせ先

所属研究科等事務部又は研究協力部国際課

医学部附属病院 病院ボランティアを募集しています

募集

医学部附属病院では、「東大病院にここボランティア」というボランティア組織があり、職業をお持ちの方、主婦の方、学生さんなどボランティア活動に興味のある方が、スカイブルーのエプロンをつけてご自分の都合に合わせてながら活動を続けています。

患者さんにとって心休まる暖かい環境作りに、あなたのやさしさを生かしてみませんか？

スタッフ一同、『あなた』のご参加をお待ちしています。

・活動場所

医学部附属病院

(本郷キャンパス内、文京区本郷7-3-1)

・活動内容

院内ガイド(患者さんのご案内、受付のお手伝い)、車椅子の介助、院内学級の送迎、図書の貸出、子供の遊び相手、病院の催し物(七夕・クリスマスコンサート等)のお手伝い、病棟患者さんの散歩のお手伝いなど

・活動時間

月～金 ① 8:30～11:30

② 9:30～12:30

③ 12:00～15:00

これらの時間帯の中で、あなたのご都合に合わせてお選びいただけます(1日3時間・月に2回以上)。

・応募条件

心身ともに健康な方

長期間継続できる方(最低30時間以上)

18歳以上の方(高校生は除く)

※ボランティア活動は無報酬でお願いしています。

※交通費、食事代、ボランティア保険料は自己負担です。

資料請求締め切り日 6月3日(金)

応募書類締め切り日 6月15日(水)

説明会 6月17日(金)

(問い合わせ)

医学部附属病院医療支援課 03-3815-5411(代表)

担当者 高橋・石塚 内線32606 FAX 03-5800-9765

担当者 小野澤コーディネータ

内線32465 FAX 03-5800-8770

大学院理学系研究科・理学部 理学系研究科・理学部 第7回公開講演会開催 のお知らせ

シンポジウム・講演会

理学研究が探る宇宙・地球・生命

人類の知的探求は、自然界のあらゆる領域に向けられている。なかでも、宇宙、地球、生命に対する理解の深化は、我々の自然観や世界観の形成にも大きな影響を与えてきた。そうした基礎科学研究の最新の成果を、各分野の最先端で活躍している研究者が解説する。

日時：4月28日(木)18:00～20:30(17:00開場)

会場：数理科学研究科大講義室(駒場キャンパス)

プログラム：

○榎森 康文 助教授

(理学系研究科生物化学専攻)

「ゲノムから探る味と匂いを感じるしくみ」

○古村 孝志 助教授

(地震研究所/理学系研究科地球惑星科学専攻)

「大地震の揺れに地球シミュレータで挑む」

○岡村 定矩 教授

(理学系研究科天文学専攻、前理学系研究科長)

「宇宙の新たな謎～ダークマターとダークエネルギー～」

参加費：無料(当日先着240名)

主催：大学院理学系研究科・理学部

(<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/>)

(問い合わせ)

大学院理学系研究科庶務係

TEL: 03-5841-7585

MAIL: shomu@adm.s.u-tokyo.ac.jp

アジア生物資源環境研究センター
アジア生物資源環境研究センター公開シンポジウムのお知らせ

シンポジウム・講演会

資源と環境で結ばれた私たちとアジア

設置後10年を経過したアジア生物資源環境研究センターの活動を振り返りながら、今後、本学がアジアにおける生物資源環境研究のさらなる発展と研究教育ネットワークの構築に貢献する方策について、この分野に造詣の深い有識者の参加を得て検討します。

日 時：5月20日(金)13:00～17:30

会 場：弥生講堂

構 成：

1. 趣旨説明
アジア生物資源環境研究センター長 武内 和彦
2. 特別講演
総長 小宮山 宏
「21世紀アジア持続の科学技術」
3. 講演
アジア生物資源環境研究センター教授 福代 康夫
「アジアの沿岸環境研究ネットワーク」
4. 講演
情報学環・学際情報学府教授 原 洋之介
「開発経済学の視点から見たアジアの資源と環境」
5. パネルディスカッション
「今私たちがアジアで出来ること」
コーディネーター：
堀 繁（アジア生物資源環境研究センター教授）
パネリスト：
岩元 睦夫（国際農林水産業研究センター理事長）
幸田 シャーミン（環境ジャーナリスト）
井上 真（農学生命科学研究科教授）
白子 幸男（アジア生物資源環境研究センター教授）
練 春蘭（アジア生物資源環境研究センター助教授）
6. 閉会挨拶
農学生命科学研究科長 會田勝美

(問い合わせ)

アジア生物資源環境研究センター 山本
〒113-8657 文京区弥生1-1-1
TEL：03-5841-7531（内線27531）

原稿募集

「学内広報」に学内の情報をお寄せください。

- ・文字数800字以内（写真がある場合は文字数を控えめにしてください。）
- ・写真には、キャプション（説明文）を添えてくださるようお願いします。

送付先 東京大学総務部広報課

TEL：03-3811-3393 内線：82032、22031

FAX：03-3816-3913

E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

原稿の締切は毎月第1・3水曜日、配付は翌々週の火曜日です。ただし、該当日が祝日の場合を除きます。

平成17年度の学内広報の発行スケジュール
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

甲藤 好郎 名誉教授

名誉教授甲藤好郎先生には病氣ご療養のところ去る平成17年1月21日午前ご逝去されました。享年81歳であられました。通夜は1月26日、告別式は1月27日、中野区の宝仙寺で行われました。

先生は大正13年9月3日奈良県にお生まれになり、昭和21年東京帝国大学第一工学部機械工学科を卒業され、昭和22年東京大学理工学研究所、昭和31年航空技術研究所にご勤務の後、昭和35年東京大学より工学博士の学位を授与され、昭和37年に東京大学工学部助教授を併任の後、昭和38年教授に任ぜられ、船用機械工学科第二講座を担当して以来昭和60年3月停年をもって退官するまでその任に務められました。定年ご退官後は平成6年9月まで日本大学理工学部教授を務められ、昭和60年5月には東京大学名誉教授の称号を授与されておられます。

先生は、東京大学理工学研究所及び航空技術研究所に勤務の間、熱工学、機械振動学、潤滑工学の分野において数々の先端的研究を行なってこられました。この間の主要な研究に気体軸受の研究と共鳴サージの研究がありますが、いずれも大変優れた研究業績であり、また東京大学にあっては伝熱工学の教育とそれに関係した重要諸問題について精力的な研究活動を行ってこられました。特に沸騰における限界熱流束の研究の成果は極めて顕著なご業績であり、甲藤のモデル、あるいは甲藤の整理式として世界的に知られた評価の高いものです。

先生のこうした業績に対し、昭和38年及び昭和54年に日本機械学会賞論文賞、昭和58年に日米熱工学合同会議表彰、同年10月東京都科学技術功労表彰、平成元年に日



本機械学会熱工学部門賞、平成3年谷川熱技術振興基金熱技術賞、平成4年紫綬褒章、平成9年勲3等旭日中綬章を受けられました。

先生の学会活動もめざましく、日本伝熱研究会会長、日本機械学会副会長、同会長を歴任され、また活躍は単に国内だけにとどまらず、国際学術誌5誌の副編集長あるいは編集委員、国際伝熱会議運営機構日本代表委員としてわが国伝熱研究の国際化に努められました。先生は我国の科学技術行政にも多く参画され、文部省工学視学委員、文部省学術審議会専門委員、文部省国立高専教員選考及び教員資格認定に係わる協力者、日本学術会議熱工学研究連絡委員会委員、日本学術振興会特別研究員等審査会委員、日本学術会議流動研究員等審議会委員、国立極地研究所運営協議員、同専門委員会委員を歴任され、また財団法人エンジニアリング振興協会海洋温度差発電委員会委員、社団法人発明協会全国発明表彰選考委員会機械専門部会副部長、部会長を務められました。

このように、先生は広範な学問領域で優れた研究業績を挙げられると共にその高邁な見識と温厚なお人柄によって多くの研究者、技術者の育成に献身し、併せて機械工学関係諸学協会や官公庁の各種委員会活動を通して我国の熱工学、伝熱工学、科学技術の進歩と発展に多大の貢献をしてこられました。大学や学会が一つの転機を迎えている今日、これまで常に大所高所から我々のあるべき姿、進むべき方向を示してこられた先生を失うことは大きな損失であり、先生のご逝去は誠に痛惜の念に耐えません。ここに謹んで哀悼の意を表し、先生のご冥福をお祈り申し上げます。なお、先生は1月21日付けで従四位に叙されたことを申し添えます。

(大学院工学系研究科)

広報委員長就任の挨拶

「元気が出る広報」

広報委員長 大木 康

このたび広報委員長を拝命いたしました、大木康と申します。もともと中国古典文学の古い書物を読むことを楽しんでいるばかりの自分が、東京大学全学の広報などという大役を仰せつかるうとは……。

前任の佐久間一郎先生はじめ、歴代広報委員長のご努力によって、発展を続けている全学広報の仕事を引継ぎ、大学内外への情報発信をさらに充実させるべく、つとめて参りたいと存じます。

昨年4月に法人となった東京大学は、今まで以上に自分たちで資金を集める努力をしなければならない、そのため広報活動もますます重要になる。それもあるでしょう。しかし、単なる資金集めのための広報であるとしたら、ちょっとさびしい。

今年の正月に行われた箱根駅伝に、本学の学生、松本翔君が、東大の選手としては21年ぶりに、関東学連選抜第8区の走者として出場を果たしたことはご存じの方も多いと思います。松本君の力走する姿を、この日はテレビにかじりついて観戦し、胸の高鳴りを覚えました。

報道されることによって始めて、選手の存在を知り、元気をもらうことができる。ここに広報の重要な役割があります。

自己満足は厳につつまなければいけません、本学の構成員はみな、それぞれの持ち場において、十分にがんばっていい仕事をしていると思います。ただ、せっかく同じ大学におりながら、お互いのことを知らなすぎるのです。

同じキャンパスの仲間ですごい人がある。それを知ること、みんなの元気に結びつくはず。一年間の在任中、微力ではありますが、東大の構成員にとって元気が出る広報を目指していければと思っております。ご支援ご協力のほどをお願い申し上げます。

広報委員長退任の挨拶

「広報の重要性和難しさ」

前広報委員長 佐久間 一郎

このたび国立大学法人化前後の2年間にわたる任期を終え、大木康教授に広報委員長を引き継ぎました。在任中に多くの教職員の皆様に多大なご支援をいただきましたことに対し、心より御礼申し上げます。

2年間の任務を通じて、大学で行われていることを適切に社会に発信することの重要性和その難しさを改めて認識いたしました。「学問的に優れた業績を積んでいけば社会は理解してくれるはずである。」と考えるのは幻想であり、社会に対して大学がわかりやすくその活動を広報し、社会の理解を求める姿勢がますます重要になっています。そして国立大学法人化により、さらにその重要性が増したものと感じています。東京大学は優れた知的活動の宝庫であり、これを効果的に発信することで十分な広報成果が得られるものと確信していますが、これをいかに実行するかが重要な課題となっていることも確かです。

広報委員会の活動は、在任中の1年目と2年目で大きく変化しました。平成15年度広報委員会は、研究科・研究所から推薦された広報委員が3つの小委員会に分かれて、学内広報誌と対外広報誌（淡青およびTANSEI）の編集刊行そしてホームページを運営することを活動の基本とし、その幹事会として広報担当の副学長と総長補佐、各小委員長、広報委員長と事務方が広報全般について月に1回程度議論する体制で活動しました。法人化を契機に役員会の下にこの広報幹事会に代わる、広報担当理事、副理事、各小委員会委員長、広報担当総長補佐、特に学内より参加をお願いした教員、企画調整役、広報課事務職員、学外から来られた特任専門員と広報正副委員長から構成される広報室が組織されました。平成16年度は合計38回の広報室会議を行い、広報全般の戦略、大学ホームページの改訂・オープンキャンパス等の広報活動、さまざまな報道メディア対応などの基本方針が検討され、実行に移されました。広報室会議では、学内で行われているすばらしい活動の社会への発信を各部局と連携し、東京大学として効果的に行うにはどうすべきかという問題や、学内教職員の横断的な連携を促進する学内への情報発信の問題が繰り返され議論されました。これらについてはいくつかの新たな試みを行いましたが、まだまだ試行錯誤の段階と言わざるを得ません。

新広報室ならびに新広報委員会が新たな体制で御活躍されることを期待し、東京大学の卓越したすばらしい活動が、より広く適切に社会に認知され、社会と大学の連携が促進されることを願いながら、私の退任の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

本郷の景色

この10年、いやもっとだろうが、本郷構内のどこかで常に建設工事が行われている。さまざまな施設の劣化や狭隘さの解消のためには歓迎すべきことであろうし、高層化によって空が狭まり日陰が広がったとしても、その程度は忍ばねばならないことであろう。しかし、最近、研究棟群の間を歩いていると、失われていくものも小さくないような気がするところがある。

このところにわかに数を増した感のある研究棟はそれぞれにユニークな姿で、あるいは単体の建築物としては高い評価を得るべきデザインであるのかもしれない。けれどもそれらが所狭しと並んでいるのを眺めたとき感じる違和感は、私の中ではそろそろ限界に達しつつある。図書館前、本郷通り沿いに続き、まもなく医学部本館前広場もちぐはぐなデザインの建物で取り囲まれようとしている。設計者



には「およそ作品たるもの個性的であるべき」という近代芸術観的な強迫観念があるのかもしれない。創造者であれば、それはある意味当然かもしれないが、大学という一体性が希求されている空間の中で、個々の建造物が外観的に個性を発揮する必要があるのだろうか。どうして既存の建造物群との同調性をもっと重視されないのだろうか。

「日本の都市景観はこんなもの、むしろこの多様性こそが活力の源」「肝心なのは研究・教育の中味、景観などどうでもよろしい」といわれればそれまでだが、わざわざ心の安静をかき乱すような景観を作り出すこともあるまいに、と思う。

キャンパスの総合的なデザインを、図面上だけでなく、立ち上がったときの姿まで含めて考えるシステムが東大にあるのかどうか私は知らないが、木立の消失と引きかえに、目をそむけて前を通りたくなるような建物が出現するのは勘弁してほしい。

榎原 雅治 (史料編纂所)

(淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1311 2005年4月13日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO